
ネギの夢見た完全なる世界を、可能な限り弄ってみた

時語り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギの夢見た完全なる世界を、可能な限り弄ってみた

【Nコード】

N3055U

【作者名】

時語り

【あらすじ】

ネギま！34巻でネギが見た、擬似完全なる世界。そこでネギが夢見た、戦闘のない、平和な学園での日々。それを想像の限りで構築し、妄想の限りで設定、性格、その他諸々等を弄くり回したらどうなるか。やってみました。*オリキャラはいません。*更新は遅いですので、どうかご理解ください。

プロローグ（前書き）

本人は知らずとも両親が魔法関係者だった人物（木乃香、裕奈等）は、今作では出来る限り魔法関係者にしていきます。何故かって？
その方が面白いと判断したからです。

プロローグ

二十年前、魔法世界における大戦で一人の英雄と災厄の女王が歴史に名を刻んだ。

大戦の二年後、当時は中継さえされた災厄の女王の処刑に乱入した英雄は、彼女を守り抜くために命を張った。

それに合わせるかのように、英雄の仲間達の一部は処刑場で英雄と女王を守るために戦い、一部は女王を悪人に仕立てた元老院の悪事を暴いて公開した。

全てを白日の下に曝け出された元老院は世間を敵に回し壊滅、災厄の女王という呼び名は歴史から消えた。

しかし女王は、自分が世界に混乱を招いたのは間違いないとし、復帰を頼まれていた女王の座を辞退する。

同時に、けじめをつけるために王族からも正式に外れ、後任に後を託して一人の市民となった。

自由を手にした元女王が王宮を去る時、その隣には命を救ってくれた英雄がいた。

極自然に手を取り寄り添いあつた二人は、英雄の故郷がある旧世界、地球へと旅立つて行った。

やがて、大戦を生き延びていた敵の残党を二年がかりで壊滅させた翌年、二人の間に男の子が生まれた。

そしてそれから、十五年の月日が流れた。

「ネギ・スプリングフィールド」

「はい」

イギリスに存在する、魔法使いの為の学校、メルディアナ魔法学校。この日は今年度の卒業式を迎えており、卒業生とその親族が講堂に集まっていた。

学校長や来賓の長い話も終わり、現在はメインである卒業証書の授与が行なわれている。

最初に名前を呼ばれたのは、歴代最高の成績を記録した十五歳の少年。

彼は通常なら十七、八歳で卒業を迎えるはずのところを、軽くスキップして十五歳で卒業式を迎えた。

「いいぞ、さすが俺の息子！」

「ば、馬鹿者！ 厳粛な場なのだぞ、大声を出すな！」

卒業証書を受け取った瞬間に聞こえた、親族席からの陽気な声。

周囲はその声にくスクスと笑いを零すが、声の主を見ると笑みは消えて表情が引き攣る。

「いいじゃねえかよ、俺って魔法学校中退だったから、卒業式なんて出たことねえんだよ」

子供のように拗ねるのは、かの英雄ナギ・スプリングフィールド。

「そういう問題ではない。せつかくのネギの晴れ姿だというのに、お前が目立ってどうする」

その英雄を咎めるのは、自由を手にして英雄と添い遂げた、元女王アリカ・スプリングフィールド。

思いがけない二人の存在に、周囲は妙な緊張感に包まれる。

と同時に、今しがた壇上で苦笑いを浮かべる少年のファミリーネームを思い出す。

この二人と同じ、スプリングフィールドというファミリーネームを。こうして卒業式は、卒業生特有の緊張感と、その親族による奇妙な緊張感に包まれたまま続けられた。

「父さん、嬉しいのは分かるけど、あんな事をするのはやめてよ」
式後、息子を出迎えたナギはネギに怒られて頭を掻く。

「仕方ないだろ。アリカにも言ったけど、俺ってば魔法学校中退だし」

「それは分かってるよ。ていうか、僕が知りたくなかった父さんの過去ランキングで堂々一位の事実だよ。あの頃までの、父さんに対する輝かしい想像を返して！」

ナギが反応する間もない怒涛のツッコミの連続をして、当時を振り返って涙が込み上げてくる。

そんな息子に、今度はアリカが慌てふためく。

「ど、どうしたのじゃ急に泣いて。緊張から解放されて腹が痛くなつたか？ それとも頭痛が」

「落ち着けて」

「あ痛っ！」

慌てふためくアリカの頭に軽くゲンコツを落とし、半ば無理矢理暴走を止める。

頭を押さえてクエスチョンマークを浮かべる妻を気にせず、ナギはせめてもの父の威厳を見せようとする。

「まあともかくだ。こっからがネギ、お前のスタートだ。お前は俺の「コピ」じゃない、お前自身になんか」

「父さん……」

普通なら、ここで良い話をしたという事で終わりになるだろう。

しかし、今回ばかりはそうはいかない。

「それ、十一年前の雪の日の夜にも言っていたけど？」

「えっ、マジで？ やべえ、同じネタ二回って、これがテンドンってやつか？」

「知りませんよ、そんな事」

あまりお笑いに詳しくないネギは、そう答えるしかなかった。

そんなやり取りをしていると、今日の卒業式に同席した幼馴染みのアンナ・ユーリエウナ・ココロウア。

通称アーニヤがやって来た。

「ネギ、新しい修行先出た？ 私はロンドンで占い師……って、ナギさんとアリカさん！ どうもこんにちは」

「よっ、ココロウアの嬢ちゃん」

「久方ぶりじゃな。前より少々女っぽくなったかの？ 体型の方は……」

雰囲気を以前より女っぽいと評し、続けて全身をくまなく見て言葉に詰まる。

背丈の方とはかく、主に胸元を見て。

それに気付いたアーニヤは、ロープで胸元を隠して反論する。

「な、なんでそこで詰まるんですか！」

「いや、それはまあ……すまん、嘘はつけんから正直に言ってよいかの？」

「……結構です」

自覚はあったのか、背中を向けて自分の胸に触れながら跪く。

どこか哀愁さえ感じる背中に、ネギはどうにかフォローしようとする

る。

「だ、大丈夫だよ、アーニヤ！ 最近は小さいに胸にだって需要が」
「ネ、ネギの馬鹿あ！」

フロロどころか、最も触れてはいけないアーニヤの逆鱗に触れてしまった。

杖を取り出して呪文を唱え、炎を纏わせた蹴りを繰り出す、これはあっさり回避される。

ならばと、今度は炎の拳を振り下ろすものの、これも何事もないかのように避けられる。

それがアーニヤの闘争本能に火を付けたのか、爆撃のような攻撃が次々と降り注ぐ。

しかしネギは全ての攻撃を尽く回避し、一撃たりとも当たることにはなかった。

「こら、避けるな！」

「そんな無茶言わないでよ！」

彼女の逆鱗に触れたら、紅蓮の如く真っ赤な雰囲気纏った彼女に、炎の拳と蹴りによって撃退される。

そのせいか、別名メルディアナの紅蓮女王様という二つ名まで授かってしまった。

中には、その女王様の一撃を喰らいたくて、わざと逆鱗に触れようという特殊な趣味を持つ者までいたらしい。

そんなアーニヤと息子の攻防戦を、ナギとアリカは面白おかしく見物する。

「うむ、これぞ青春じゃな」

「っていうかネギの奴、火に油注いでどうすんだよ」

貧乳指摘されたアーニヤを、火に油を注ぐに例えるとは言いえて妙だ。

最もアーニヤの場合は、火どころか爆撃なのだが。

その爆撃を避わしている最中、ネギの手に握られていた証書が輝く。それは新しい修行の地を告げる報せ。

「あつ、浮かび上がるみたい」

「何？ どこじゃ？」

「おつ、やつとか」

「どれどれ？」

先ほどまで怒りに燃えていたアーニヤの炎も一瞬で消え、ナギとアリカと三人でネギの証書を覗き見る。

全体に灯っていた輝きは消え、修行の地を示す光の文字だけが残っていた。

A T E A C H E R I N J A P A N T O M A H O R A G A
K U E N

「日本の麻帆良学園で、先生をすること？」

「ええええつ！」

やけに具体的な行き先を知ったアーニヤは、悲鳴に似た声を上げる。しかし、当の行く本人とその両親は冷静だった。

「へえ、日本の麻帆良学園か。近衛の爺さんまだ生きてたっけな」

「ふむ。麻帆良学園といえば、タカミチとガトウがいるのではないか？」

「タカミチやガトウさんだけじゃないよ。ほら、ネカネ従姉さんが

嫁いだのは」

驚いて表情が引き攣ったままのアーニヤを放置して、過去に会った事のある人物や、かつての仲間、嫁に行った従姉を思い出す。

後頭部が奇妙に突き出た老人、タバコに眼鏡の二人の男、そしてネギが幼い頃は面倒をよくみてくれた従姉。

良くも悪くも個性的な四名の顔を思い浮かべ、話は弾む。

「おおっ！ そうだった、そうだった」

「ネカネか、そういえば久しく会っていないの」

「イギリスと日本だからね、仕方ないよ」

「……………」

和気藹々と家族の会話をする傍らで、正気には戻ったものの、置いてきぼりにされている感の漂うアーニヤ。

かつてのナギの仲間として有名なガトウとタカミチ。

幼い頃にネギと一緒に世話になったネカネの話ならともかく、行き先の土地の話になってしまっただけは口を挟む余地が無い。

「そつえばナギ、お前が昔封印したというエヴァ……………なんとか、なんとか・キティ・なんとか、とかいう奴が麻帆良にいた気がするが」

「エヴァ？ ……キティ……………ああ、あいつか。すっかり忘れてた」

ナギは十数年前に出会い、訳あって封印した吸血鬼の少女の事を思い出す。

いつか迎えに来ると言っただけ、すっかり放置している、魔法世界では有名だった元六百万ドルの賞金首の少女を。

「五年前の従姉さんの結婚式の時も、タカミチに言われたのに忘れて帰国しちゃったもんね」

その時、帰りの飛行機が離陸する寸前で思い出したナギは、タカミチという人物にメールを打っておいた。

酒のせいでエヴァの事、すっかり忘れてたZ.E.と。

このメールの一文を読んだタカミチは、顔色を真っ青にして五分ほど固まっていたらしい。

「俺だけにしか言わなかった、あいつにも二ミリくらい責任があるけどな」

「それもそうじゃな。私かネギにも言っておけば、帰国前に対応させたものを。もっとも、ナギが忘れていなければ問題は無かったのじゃがな」

さりげなく責任逃れしようとしたのを見抜かれ、妻に冷たい視線を送られたナギは視線を泳がせる。

「大丈夫だよ、母さん。前にその事でガトウさんから送られてきた手紙に、タカミチは無事だって書いてあったから」

確かにタカミチという男は無事だったが、二ヶ月近くエヴァンジェリンという少女に八つ当たりの対象とされた。

ちょうど停電で呪いが弱まる時期もあったらしく、夜中に行なわれた二人の凄まじい追いかっこは、麻帆良学園の魔法使い達の間で今でも語り継がれている。

「ともかく、頑張ってくるんじゃぞ、ネギ。私らもたまには遊びに行くから、部屋は綺麗にな」

「いかがわしい本が隠せるよう、事前に連絡くらいは入れてやるぞ」

「ナギ！」

夫の不適切な発言に妻として教育的指導を出す。

王家の魔力を発してナギの腕を掴み、合気道のように投げ飛ばす。そのままナギの体は床に叩きつけられると思いきや、伸身二回宙二回捻りをやって着地した。

見事な体裁きに、ネギは心の中で十点のボードを出す。

「おいおい、こんな事に王家の魔力使うなよ」

「おおお、お主がふしだらな事を言うからじゃろっ」

「よく言っぜ、昔は夜な夜なそっちから色仕掛」

「言っな、馬鹿者！」

今となつては恥ずかしい過去を暴露されそうになり、アリカが暴走開始。

王家の魔力を込めた攻撃を繰り出すものの、大戦を生き抜いたナギは笑いながら回避する。

そんな夫婦のスキンシップの中、ネギはいつもの事のように笑って傍観していた。

「あれ？ 何？ 私ってすっかり空気？」

廊下の端っこで体育座りして見学していた、アーニヤを取り残してこうしてネギの日本行きが決定し、一カ月後に旅立ちの時を迎えた。この日のためにとアリカが準備してくれたコートとリュック、ナギが用意してくれた杖とブレスレットを身につけて。

「じゃあ父さん、母さん、行ってきます」

「うむ、体に気をつけてな」

「しっかりやれよ。あっ、そうだネギ。爺さんやガトウ達がいるか

ら平気だと思っけど、万が一エヴァに何かされそうになったら、あれ使っていいぞ」

付け加えられた内容に、ネギとアリカの表情が変わる。にこやかな笑みは消え、驚き一色に塗りつぶされる。

「で、でも父さん、あれはまだ不安定で」

「分かっているって。俺達も最悪の場合に備えて、ちゃんと手は打っておくから、安心しろ」

親指を立てて笑顔を見せる父親に、僅かに生じていた不安も吹き飛ばす。

表情一つで不安を取り払える辺りは、さすがはかつての英雄なことはある。

「分かりました。じゃあ、父さんと母さんにお任せします」

「おう、任せておけ！」

「ナギの世話は私がしっかりするから、しっかり修行に励むのじゃぞ」

「はい！」

しっかりと返事をしたネギは、両親に手を振って旅立っていった。

「あれ？　そういえば、麻帆良にまだ何かあったような？」

「アルの事か？」

「いや、ガトウ達がいるんだし、あいつの事は別に問題ないだろ。もっと別の、大事な何かをいくつか忘れてるような」

意味深なナギの言葉を聞くこともなく。

ネギが故郷を旅立ったちようどその頃、麻帆良学園にて僅かながら

動きがあった。

学園長に呼ばれた少女二人が、学園長室を訪れて呼び出した理由を尋ねる。

「今日はなんの用なん、お爺ちゃん」

「うむ、実はわしの友人のメルディアナ魔法学校の校長から、こんな手紙が届いての」

机の上に差し出された手紙を少女の一人が取り、開封して内容を声に出して読む。

すると二人の少女の表情が驚きに変わった。

時を同じくして、麻帆良学園の敷地内に建つ、とある神社の一室にて。

「この手紙は本当か、義姉さん」

「ええ、本当よ。ついさっき、魔法便で叔母様から届いた物よ」

満面の笑みを浮かべる女性の正面に正座している少女は、手紙を再度読みながら不適に微笑んだ。

同じく麻帆良学園の女子寮でも。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」姉の報せに感謝」

同じくログハウス。

ファンシーな室内でメイドを従えた少女が、メイドの持って来た書類を片手に満面の笑みを浮かべている。

「この情報は本当なんだろうな？」

「はい、ほぼ間違いかと」

「くっくくく、面白い事になりそうじゃないか。さあ、このボウヤをどうしてやるか」

そんな数多の動きがあるとも知らず、飛行機の中でネギは新たな修行の地に想いを馳せる。

こうして、一人の見習い魔法使いの新たな生活が始まろうとしていた。

プロローグ（後書き）

「ネギま！」は久々に書いたもので、どうでしょうか。
以前は別サイトで結構書いていたんですけどね。
何かありましたら、どうぞお知らせください。

来日初日はこんな感じで

アリカが準備してくれた大きなりユックに荷物を詰め込み、ナギが用意してくれた杖を背中に背負ったネギが、日本の地を踏んだ。外見のせいかわ、先ほどから擦れ違う女性の熱い視線が突き刺さっている。

だが残念な事に、ネギはその熱い視線の理由に気付いていない。

「ふう、やっと着いたよ。やっぱり遠かったなあ」

長旅の疲れを癒すようにロビーのベンチに腰掛け、手帳を広げて乗るべき電車の方面と乗り継ぎを確認する。

しばらくして確認と休息を取ったネギは、荷物を背負って麻帆良へと向かう。

電車を乗り継ぎ、ようやく最後の電車に乗ったネギは空いている席に腰を下ろし、持ってきた本を読む。

学園は冬休み中とあって、普段なら通学ラッシュの車内も乗客は疎ら。

お陰でゆっくりと本を読んでいられる。

そうして何ページかを読み進めると、ふと横から視線を感じたので右方向へ目を向ける。

「……………何か用？」

振り向いた先には、無表情でこちらを見ている修道服を着た褐色肌の少女。

無言でネギを見ていた少女は、おもむろに手帳とボールペンを取り出して差し出す。

「サインください、ナギ・スプリングフィールドさん」

この発言で、目の前の少女が魔法関係者であり、父と勘違いしている事に気付いた。

「ええっと、悪いんだけど僕は息子のネギ・スプリングフィールドなんだ」

「……………ナギさんの息子さん？」

「そうそう」

「…………それはそれでレア物だし、将来プレミアも付きそうだからサインください」

本音を隠すことなく改めてサインを求める姿は、いつそ清々しい。そんな清々しさに負けたネギは希望に応え、手帳にサインをする。名前と日付を記入し、後は名前を書こうとしたところで筆が止まる。

「えっと、君の名前は？」

「ココネ」

「ココネちゃんへ…………と。はい、どうぞ」

サインを書いたページを開いて手帳を返すと、顔には出していないが嬉しそうな雰囲気漂う。

「どうも」

「いえいえ」

簡素な挨拶を交わした後、二人はそれ以上の会話も無く目的地まで向かう。

偶然にも同じ駅で降り、ココネはどこかへ向かい、ネギは案内人を待つために駅前に設置されたベンチに座る。

そのまま本の続きを読んで待つ事数分。
煙草の匂いと共にスーツに眼鏡の中年男性が、徒歩で駅へとやって来た。

「久しぶりだな、ネギ君」

声を聞いたネギは本を閉じ、声の主に返事をする。

「はい、お久しぶりです。ガトウさん」

かつての父の仲間の一人で、仲間内で最も大人びていた男、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ。

そんな大人びた雰囲気も、大戦から二十年経った今では、定年間近のおっさんにしか見えない。

最も、実力はさほど衰えてはいないが。

「それにしても大きくなったな、前に会った時はこれくらいだったのに」

腰の辺りに手を添えて、当時のネギの身長を振り返る。

「ええ、そんなに小さかったですか？」

「はははっ。ネカネ君の結婚式の時に会っていれば違っただろうが、その時俺は出張中だったからな」

短くなってきた煙草を喫煙所にある灰皿に落とす、二人は揃って学園へと向かう。

その道中で、ある人物の事を尋ねた。

「そうそう、今日はタカミチ、学校に来ていますか？ 前の事を父

さんに代わって謝りたいんですけど」

するとガトウが少し気まずそうな表情になった。タカミチに何かあったのか、それとも聞いてはいけない事を聞いてしまったのか。

どちらにしろ、真相を聞かなくては分からない。腹を括ったネギは、唾を飲み込んでガトウに再度尋ねる。

「あの、ガトウさん。タカミチは……」

「あいつは今、入院中だ」

「にゅ、入院!？」

魔法世界でも有名で、戦闘格付けは父には及ばないものの、かなりの高い位置にいる。

魔法こそ使えないものの、師匠であるガトウ仕込みの技でそこまで這い上がった。

そんなタカミチが入院と聞き、彼を知るネギは不安に包まれた。

「ど、どんな強い敵と戦ったんです?」

「いや、入院の理由は戦闘の怪我じゃないんだ」

「えっ? じゃあ、どうして入院しているんですか? 病気か何かですか?」

「病気って言えば病気だが、ううん……」

今度はなんとも微妙な表情をして頭を掻く。

「いったい何なのかと待つこと一分、ようやくガトウが重い口を開いた。

「実はその、な。あいつ、重度の神経性胃炎を患って」

「胃? 胃って、内蔵の一つの胃袋の事ですか?」

「そう、その胃の炎症。略して胃炎だ」

どうして彼が胃炎を患って入院したのか、ネギには分からなかった。暴飲暴食をするタイプでは無いし、自棄でするとしても一回で収まりそうだ。

ならば、何故そんな彼が胃炎になったのか。

神経性と言っていたが、何か困った事でも連発しているのだろうか。

「それというのも、あいつが受け持ったクラスが原因なんだ」

「タカミチのクラス？」

小さく頷いたガトウが大きく息を吐き、胃炎の原因を次々と口にする。

「あいつは今、中等部の二年を受け持っているんだが、これが良くも悪くも個性的な顔が多くてな。毎日のように騒ぎを起こす、学年上位に食い込む生徒がいるのにクラス別では万年最下位の成績、そんな事ある度に教頭からお小言を貰っていたからな。色々と限界だったんだろつな。医者の話では、もうちよつとで胃に穴が開くとこるだったそうだ」

次々と並べられた、タカミチを入院させた神経性胃炎の原因。

それを知ったネギは、自分は大丈夫かと不安になる。

もしも自分も同じような事になって、母親に事が伝わったら。

あの母親の事だから、おそらく一般人の前にも関わらず転移魔法を使っって見舞いに来そうだ。

「なんだか凄く不安になってきました」

「なあに、大丈夫さ。何せお前は奴とアリカ様の息子だ。多少の騒動には慣れているだろ？」

確かに少々の騒動には慣れてはいるが、さすがに一クラスの人数となると不安は簡単には無くならない。
これまではせいぜい二人だったのに対し、今度は三十人前後が相手なのだから。

「そうそう、お前が受け持つのはタカミチが担当していたクラスだ。あいつに代わって、担任をやって貰うだとさ」

「ちよつ、ええええつ！ タカミチを神経性胃炎で入院に追い込んだクラスを！？」

いきなりの担任、しかも相手は父の仲間を入院に追い込める騒がしさ、成績を持つクラス。

この時ネギは、遠い地にいる友人や両親に本気で助けを求めたくなつた。

同時に、こんな課題が与えられた事が恨めしく思った。

そうこうしているうちに二人は学園に到着し、一路学園長室へ向かう。

生徒が一人もない校内を歩き、到着した学園長室の扉を開ける。

中には後頭部が突き出ている老人、近衛近右衛門が席に座っている。

「学園長、彼をお連れしました」

「うむ、ご苦労。久方ぶりじゃな、ネギ君」

「はい、こちらこそ。従姉の結婚式以来ですね。次に会えたのが父さんの言った通り、あなたのお葬式でなくてよかったです」

厄介なクラスを任される事への腹いせか、会って早々にかました毒舌に、一瞬ガトウの表情が引き攣る。

一方の学園長は笑いながら、そんな事を言っておったな、などと思ひ出話を語るようにひょうひょうとしてしている。

「ところで、ネギ君は少々不機嫌のようじゃがどうしたんじゃ？」
「ここに来る途中で、タカミチを入院に追い込んだクラスの担任をやれと聞かされたので」
「なるほどのお。じゃが、これも修行のうちじゃ。この修行が上手くいかなかったらどうなるか、分かっておるうな？」

これまでの軽い雰囲気が一転、鋭い目つきと重い雰囲気を向けられる。
年齢に見合わぬ圧倒的な存在感は、そこらの魔法使いなど目ではない。
それを肌で実感しつつ、しっかりとした声で返事をする。

「勿論です。日本式の責任の取り方、切腹をすればいいんですよね？」

真剣な眼差しで自決を口にされて、さすがのガトウと学園長も慌てる。

「いやいやいや、ネギ君。それはいつ、誰に聞いたんだ？」

「幼い頃に父から聞いたんですけど？」

「やつぱりあやつか……。ネギ君、それは間違った知識じゃから忘れてよいぞ」

「そうなんですか!？」

驚きに包まれたネギの顔を見て、彼の父に適當かつ中途半端に日本の知識を教えられたのが目に浮かぶ。

これまでに日本に何度か来ているので安心してはいたが、この調子では油断ができなさそうだ。

「じゃあ母さんに聞いた、日本文化の象徴、丑の刻参りも」

「大間違いじゃ！」

「日本人がプライドを捨ててまでお願いする時にする、水面から脚だけ出している犬神家というのも」

「まったく違あああうっ！」

どうしてアリカがそんな物を知っていて、どう誤解しているのかはこの際どうでもいい。

両親とも浮世離れに加え、ナギは能天気、アリカは箱入り。

そんな二人に教わった、間違いだらけの日本の知識を正す方が先決だと判断した。

「ともかく、ネギ君には教育実習生として三学期から2 - Aの担任になってもらう。よいかな？」

「はい、勿論です」

なにはともあれ仕事の話が終わり、学園長とガトウはほっと一安心する。

たった数分の出来事だと言うのに、魔力による強化も無しにフルマラソンを走りきった気分だ。

「ではネギ君、君の住む場所は教職員寮に部屋を用意してある。後の事は明後日の始業式の後という事にしようかの」

「分かりました。では、失礼します」

丁寧に一礼してネギが退室すると、二人は大きく息を吐く。

父親と違って真面目だからと安心してはいたが、やはりあの二人の子供だと実感させられた。

もしも先ほど修正を入れなかったら、土下座する場面で犬神家をされていたかもしれない。

「彼、大丈夫でしょうか。色々な意味で」

「ふむ……彼の教育係には、それなりに日本文化に詳しい者を付けるかの」

そう呟いて、手元にあるネギの教育係候補の書類を見直し始める学園長だった。

一方のネギは、久々に訪れた街中を上機嫌に歩いている。擦れ違う女性が十人いたら、十人を振り返らせながら歩いているので、自然と周囲から注目される。

そんなネギに、特に熱い視線を向けながら後をつける四人がいた。気配に気付いたネギは人通りの少なさそうな場所を目指す。

やがて辿り着いたダビデ像前という場所で周囲を見渡す。人っ子一人いないのを確認して、未だに気配のする四人に声を掛ける。

「そろそろ出てきたらどう？ それとも、出て来れない理由でもあるのかな？」

場合によっては戦闘になるかもと、杖を構えて人払いの魔法を使う準備をする。

しかし、その心配は一切無用だった。

「大丈夫だ、敵ではない」

段差を飛び降りてネギの目の前に姿を現した褐色肌の巫女。

彼女の名は龍宮真名。

元は四音階の組み鈴という、魔法使いの団体に所属しており、パートナーだった義兄の結婚を期に脱退した過去がある。

その結婚相手というのがネギの従姉にあたる、ネカネという女性だ。

つまり彼女とは、義従兄妹の関係にある。

「そう構えんといてやネギ君。ウチやウチ」

「すみません、尾行などしてしまつて」

続いて階段を降りて来たのは大和撫子風の少女と、目つきの鋭い木刀を持った少女。

名は近衛木乃香と桜咲刹那。

父の別荘がある京都で知り合つた、学園長の孫とその護衛。

「……………お久しぶりです」

物陰から姿を現して従者のように片膝を着く、メイクらしき模様が顔にある褐色肌の少女。

名はザジ・レイニーディ。

彼女の父は大戦期に敵対勢力の一部だった魔族の中で一番偉いらしく、大戦期にその父親がナギと戦つて以来友人になり、その縁で出会つた事がある。

「なんだ、皆さんでしたか。つい、父さんにやられた過去を持つ輩が、憂さ晴らしに息子の僕を襲いに来たのかと」

「やけに具体的だな。あつたのか？ そういう事が」

「二、三年前に五、六度ほど。父さんと一緒に全員返り討ちにしました」

「さすがです、ネギさん」

顔見知り同士と分かり、張り詰めた空気は穏かなものに変わる。全員で近くのベンチに集まり、他愛もない会話を交わす。

「へえ、皆さん同じクラスなんですか」

「そやで。2-Aのクラスメイトや」

「2-A? という事は、僕が皆さんの新しい担任ですね」

「ほお、そうなのか。だが、高畑先生はどうなるんだ?」

「ああ……実は、その事なんですけど……」

ここで四人は初めて、高畑の入院とその原因を知った。

思い当たる節があるのか、全員は顔を見合わせて微妙な表情をする。

「それで、高畑先生はどうなるんですか?」

「学園長の話では、今後の精神的負担を減らすためという理由で、生徒指導部に移すみたいです」

「……体のいい左遷」

ザジが小声で毒舌を囁いた頃、病室で横になっている高畑は訳も分からず悲しくなってきた。

最も、担任として結果を出していなければ、左遷と思われても無理はないだろう。

タカミチ・T・高畑、彼はまだ、教師としては崖を登ろうと足掻いている最中である。

「そういえば、皆さんはどうしてここに? 今日はまだ、学校は長期休み中はずですけど」

「それについては……」

ネギの問い掛けに龍宮はポケットから一通の手紙を取り出す。

宛先はネカネで、差出人はアリカ。

「この手紙で今日、君が来ることを知ったんだ」

「ウチらもお爺ちゃん宛に来た、メルディアナの校長さんの手紙で」

「父に届いたナギさんからの主に息子自慢の手紙の内容を、姉が伝

えてくれました」

「そうでしたか」

それならば納得できると、小さく頷く。

「そして学園前で君を見かけたのだが、いつ声を掛けようかと迷ってな」

「私達も右に同じくです」

「以下同文」

わざわざ会いにきたくせに、妙なところで迷いが生じたものだ。それが結果として、先ほどまでのストーカー行為に繋がった。しかし、こうして会いに来たのは、もっと別の理由がある。

「そやネギ君、これ覚えとる？」

木乃香がおもむろにポケットから取り出したのは、折りたたまれた一枚の古い紙切れ。

破れないようにそつと広げると、そこには幼い頃に京都に遊びに行った際、当時のネギが書いた日本語の文字が書かれていた。

別れの前夜に木乃香と刹那に頼まれて書いた、たどたどしい平仮名による文章が。

せいやくしよ

じゅうごねんごに、このちゃんをおよめさん、せつちゃんをおくさんにするとかいます

ねぎ・すぶりんぐふいーるど

「それと、こちらです」

子供時代の懐かしい思い出の品だと思っていたら、今度は刹那が一通の書類を差し出す。

これも思い出の品かと思いきや、全く大違いの内容があった。

十五年後に三人の気持ちが変わっていなかったら、本日ネギ君が書いた誓約書を、近衛木乃香の父であり、桜咲刹那の後見人である私が認める

近衛詠春

ネギの父親として、詠春と同じ前提の下、息子の書いた誓約書を認めるぜ

ナギ・スプリングフィールド

先ほどの子供のお遊び程度の誓約書を認めるという、互いの父親の拇印と直筆サイン入りの書類だった。

「ちよおっ！　なんですかこれはあー！！」

驚いたネギが問い詰めると、木乃香と刹那は不思議そうな表情をした。

「ほえ？　ネギ君知らなかったんか？」

「ナギさんかアリカさんに聞いていないんですか？」

「聞いていませんよ、こんな事！」

仮に聞いていたとしたら、どうなっただろうか。

どちらにしろ、面白い事になっていたのに違いない。なにせ、これだけでは終わらないのだから。

「なるほど、では二人は私の敵だな」

そう言つて、同じように折りたたまれた書類のような物を差し出す龍宮。

嫌な予感はあるものの、開けずにはいられない。

微かに震える手で書類を開いたネギが読んだ、その内容は。

いずれ真名をネギ君のパートナーであり、生涯の伴侶にする事を希望する

龍宮父

ネギが無事に魔法使いになれて、互いにそのつもりがあるならいいぜ
ナギ・スプリングフィールド

「ちなみにそれはコピーだ。本物はウチの金庫で厳重に保管してある」

予想通りの内容に肩を落とすネギに龍宮の言葉は聞こえているのか、聞こえていないのか。

持ち出した書類が本物であろうかなかろうが、今のネギにはどうでもよかった。

今はともかく、状況を理解する時間が欲しい。

しかし、そうは問屋が卸さない。

「……どうぞ」

とどめとばかりに差し出されたザジからの書類。

もういい加減にしてくれと、半ば自棄気味に書類を開く。

勿論、その内容は。

魔法使いと魔族間における友好の架け橋として、貴殿の息子に我が次女を嫁がせる事を望む

レイニーディ父

本人達がそのつもりなら、ネギの父としてこれを認めてやる
ナギ・スプリングフィールド

「……………」

もはや何も言う気力は無かった。

沈黙するネギの様子を見ている四人はどうするべきかと観察する。
すると、すわった目をしたネギがゆらりと立ち上がる。

「ネ、ネギ君、どないしたん？」

「ちよつと帰郷して、父さんを殴ってきます」

背を向けて駅の方へ向かうネギを、慌てて刹那が抑える。

「やめてくださいネギさん！　ちよつとで行ける距離ではありませんよ？」

「大丈夫ですよ。父さんを殴ったら、すぐに戻ってきますから」

「そういう問題じゃないでしょう！　第一、明後日には始業式なんですよ！？」

麻帆良からウエールズ間往復、二泊三日の弾丸ツアー。

帰ってくる期限は日本時間で明後日の始業式の開始まで。

内容はナギ・スプリングフィールドを探し出して殴る。

とてもじゃないが、間に合う気がしない。

「仕方ない、ここは母さんにメールを送って、代わりに殴っておいてもらうか」

少し冷静になったネギは、携帯を取り出して母宛にメールを送る。
携帯に慣れていないアリカが四苦八苦しながら息子からのメールを

読み、夫を呼んで頭を小突いた。
その後ナギから、すまん、忘れていたという軽い調子のメールが返ってきた。

「まったく父さんは……。呆れて物も言えないよ」

半ば無理矢理納得し、溜め息を吐いてベンチに座りなおす。

「すみませんね、父が面倒をかけて。すぐに皆さんのお父さんに連絡をして、これの無効を申し出」

「そんなっ！ 無効になんてしないでください！」

「……はい？」

アドレス帳を開いたタイミングで刹那が割って入る。

何故か涙目で。

呆気にとられていると、次から次に反対の音が飛んでくる。

「ウチらが何年もずっと持った、この淡い想いはどうすればいいんや！」

「ネギさんとの婚約を励みに、花嫁修業に邁進した日々は……」

「君のパートナーに成りえるよう、鍛錬を重ねてきたんだぞ！」

胸の辺りで両手を握り締める木乃香、昔の写真を見つめて俯くザジ、両手に拳銃を持って迫る龍宮。

ネギは、齢十五歳にして人生の分かれ道という場を知った。
下手をすれば修羅場になる、ある意味最悪の分かれ道を。

「父さん、母さん。僕、色々な意味で強くなれそうです」

来日初日から修羅場に叩き込まれたネギ。

彼の修行は正に、親に崖から突き落とされた子ライオンのような気分での始まりとなった。

来日初日はこんな感じで（後書き）

やっぱり「ネギま!」といったらハーレムでしょう。
勿論、まだ増やしますけどね。

突撃 教職員寮の晩御飯の席

麻帆良学園の教職員が暮らす場、教職員寮。

その一室に、十五歳の見習い魔法使いが教師として入居した。

「ネギさん、これはどちらに？」

「それはリビングに置いておいてください」

「このダンボール箱は？」

「中身は本ですから、そっこの部屋にお願いします」

先ほど出会い、いつの間にか父親公認の仲にされていた四人と共に荷物の整理をする。

魔法関係の道具は万一に備えて誤魔化す必要があるので予め集めておき、認識障害の魔法を掛けておく。

その他の荷物は中身ごとに部屋に運び、少しずつ片付ける予定でした。

しかし、そう簡単に思惑通りに進まないのが人生というものである。

「ネギ君、相変わらず真面目な本ばかりやなあ。思春期真っ盛りの男の子なんやから、エッチな本の一つはあった方が健全やないか？」

「余計なお世話です！ というか、父さんみたいな事を女の子が言わないでください！」

「魔界の淫魔が書いた官能小説で良ければ持っています。引越し祝いに取ってきますね」

「ちよつと待ったあああつっ！」

玄関に向かおうとするザジを引き止め、何故そんなのを持っているのか問い詰める。

すると彼女は。

「後学のために……」

と、無表情のまま頬を染めて視線を逸らして答えた。

ここでどんな後学かを聞いたら大変な事になりそうなので、それ以上の追求をするのは止めた。

とにかく、その本はいらないと答えて片付けに戻る。

「まったく、父さんといい、皆さんといい。僕をどうしたいんですか」

「肉欲に溺れさせて、ほぼ毎日生徒である私達の体を」

「それ以上は言わせませんし、何もしませんよ！」

発言を遮られた龍宮は惜しいと呟いて、片づけを再開する。

何が惜しいのかは、本人のみぞ知る。

それから、しばし真面目に整理に取り組み、どうにかこの日のうちに片づけを終えられた。

「お疲れ様です、皆さん」

リビングにある備え付けの椅子に座っている四人の前に、冷たい飲み物を置く。

それを飲んだ木乃香がふと時計を見て、そろそろ夕食の時間だと気付く。

「あやや、もうこんな時間や」

「うわ、ホントだ。夕飯どうしようかな？」

まだ買い物も何もしていないため、冷蔵庫は空っぽ。

あるのは残りの飲み物だけ。

仕方ないので出前でも取るうかと携帯を取り出したと同時に、玄関からチャイムの音が響く。誰だろうとネギが対応すると、扉の向こうから懐かしい声が聞こえる。

「どなたですか？」

「私よ、ネギ。わかる？」

幾年か振りに聞いた声に扉を開け、外にいた男女をその目に納める。

「久しぶり、ネカネ従姉姉さん、コウキ義従兄さ……ん？」

久々に会った笑顔の従姉夫婦のだが、少々気になる事があった。服装が巫女と神主風なのと、ネカネの腕にぶら下がっている、飲み物と菓子の入ったビニール袋は百歩譲って良しとして、問題はコウキが持っている物にあった。

「あの、お義従兄さん？ それはなんですか？」

「何って、引越し蕎麦。真名から連絡を貰ってな、うちで作って持ってきたんだぞ」

そう言って差し出した蕎麦は、ザルではなく丼に入っている。

要するに汁と麺を別々にした冷たい蕎麦ではなく、汁に浸って運ばれて来た温かい蕎麦。

しかも龍宮神社からここまで、来られない距離ではないが、かなりの距離がある。

それはつまり。

「うん、気持ちは嬉しいよ。だけどまずは二人共、器の中身を見て」

指摘されてラップ越しに器の中を見ると、汁はすっかり冷めて麺も伸びきっていた。

しかも何故かたぬき蕎麦だったので、揚げ玉が汁を吸ってふやけている。

「……………しまった、俺とした事が」

「これが俗に言う、孔明の罠というもののなね」

「いや、孔明の罠は関係無いよ。完全にそっちのミスだよ」

ともかくこの場で最もすべきは、この伸びきった人数分の蕎麦をどうするかである。

捨てるのは勿体無いし、持ち帰らせても蕎麦は元に戻らない。ならば、やるべき事は一つ。

「……………不味い」

「ウチ、こない虚しい引っ越し蕎麦は初めてや」

予定通り、リビングに持ち込んで食べる。

麺が伸びきつていようが、汁がぬるかろうが、揚げ玉がふやけていようが腹に入れる。

捨てるよりはマシだし、とりあえず腹は膨れる。

味はとても褒められたものではないが。

「すまん、俺が孔明の罠にかかりさえしなければ」

「そんな事は無いわ、コウキさん。私も同罪よ」

「ネカネツ！」

「コウキさんっ！」

「だから孔明の罠関係無いって。それとイチヤつくなら外でやって！そして皆さんも、そんな目で見ても何もしませんよ！！！」

熱い抱擁を交わす従姉夫婦にツツコミを入れ、それを羨ましそうに眺めながらネギに視線を向ける四人に制止を掛ける。
言う前に制止させられた四人は露骨に残念そうな顔をするが、生憎とそれくらいではネギは揺るがない。

「はあ。ネギ？　これだから本格的な修行だし、この子達が生徒になるのは分かるけど、だからって無理は駄目よ？」

「別に無理してないよ」

「そうか？　こんな可愛い子四人に迫られているんだからさ、我慢する事はないぞ」

伸びきった蕎麦を啜りながら語るコウキは、結婚してから、というよりネカネに出会ってから随分と変わった。

前は儀と礼儀に厚い真面目な人物だったのに、恋をしてからは明るく面白いお兄さんに変化した。

正直、ネギとしては以前のコウキの方が魔法使いとしては尊敬できた。

「人って何かの切っ掛け一つで変わるんだな」

「？　何言つとるん、ネギ君」

蕎麦を食べ終えた空の器を前に、肩を落として溜め息を吐いて呟くネギに、周囲は不思議そうに首を傾げるのだった。

それからしばらくし、問題の蕎麦を食べ終えた一同は真面目な話をしていた。

「そういえばネギ君、君には英語以外にも教えるべき事項があると、学園長に聞かされたか？」

「いえ、別に。何かあるんですか？　日本史や国語は無理ですけど、世界史や数学ならなんとか」

「そういつんじやなくてな、お前は魔法先生だろ？ だから魔法教えるんだよ」

「……どなたにですか？」

「お前の受け持つクラスの魔法生徒」

聞いてない事実には表情を引き攣らせつつ、自分のクラスの魔法生徒、木乃香に視線を向ける。

しかし本人はにこにここと笑うだけで、返事をしない。

ならばと、刹那や龍宮、ザジにも視線を向ける。

すると龍宮が、自分達は魔法生徒ではないと三人を代表して告げる。彼女の両隣に座る二名も頷いているので、間違いではない。

「二学期までは高畑さんが教えていたらしいけど、あの人今ちよつとね」

「入院中なんですよ？ ガトウさんに聞いていますよ」

「ありや、そうなんだ。なんだよあのオッサン、だったら魔法教える事も教えとけてんだよ」

ブツブツと文句を言いつつも、魔法で麻帆良学園にいる魔法先生と魔法生徒の顔写真をスクリーン状で映して説明を始める。

「ネギも知つての通り、この学園には正式な魔法使い、又はお前同様に仮免魔法使いによる魔法生徒がいる。同様に、仮免に達してもいない魔法生徒もな。こういった、仮免に達していない魔法生徒を指導するのも、仮免以上の魔法先生、魔法生徒の役割なんだ」

仮免以上を青、仮免未満を赤で点滅させながら説明をしていく。要するに、この前までの自分と同じ立場の魔法生徒を指導しろという事を。

「なるほど。ちなみに、僕が担当するのは？」
「ちよつと待つてるよ。ええつと」

スクリーンをタッチパネルのように操作して、ネギが指導する魔法生徒を表示させる。

表示されたのは、木乃香他三名の2 - A魔法生徒。

2 - A 出席番号2番 明石裕奈

2 - A 出席番号8番 神楽坂明日菜

2 - A 出席番号9番 春日美空

2 - A 出席番号11番 近衛木乃香

顔写真付きの映像を見て、ある人物のところで思考が停止する。

出席番号8番、神楽坂明日菜の箇所です。

「あ、あの、この神楽坂さんって……」

「あら、やっぱり気付いたのね。そう、アリカ叔母様のご親戚で、今はガトウさんが後見人をしているアスナ姫よ。姫の前に、元が付くけどね」

強烈な事実を突きつけられ、額をテーブルに打ち付ける。

そして思い出すのは、男として屈辱の日々。

たまにガトウに連れられてイギリスに遊びに来ては、似合うからと女装させられ、無理矢理長風呂につき合わされてのぼせかけ、無茶を言われて苦労した日々を。

「息継ぎ無しで湖の向こうに行くなんて、無理無理無理無理無理無理……」

嫌な思い出が浮かんだのか、頭を抱えてトラウマモードに入る。

そんな姿を見て、ネギと明日菜の過去を知らない面々は、何があったのかが凄く気になった。

「大丈夫ですか？ ネギさん」

「大丈夫ですけど、大丈夫じゃありません」

「……どっち？」

訳の分からない返答をしている辺り、まだ大丈夫とは言い切れない。

「ええっと、話続けて平気か？」

「お願いします」

暗い雰囲気醸し出す様子に不安を覚えつつ、説明を続ける。

「現時点でのこの四人の魔法教育は、このくらい。それで、これが各々の成績とその他データな」

慣れた手つきで四人の学習状況、成績のデータ、魔力容量等を表示していく。

魔法の射手の命中率がやたら高い裕奈。

基本魔法以外は、身体強化系魔法しか使えないが、前衛能力に長けている明日菜。

どれも平均前後辺りの美空。

抜きん出た回復魔法適正と、膨大な魔力を持つ木乃香。

正直言って、この四人でパーティーを組めば、少々の事ならなんとかできそうだ。

「教える必要、ありますか？」

「気持ち分かる。けど、勉強面での授業がまだ終わってないし、経験も浅く使える魔法の種類も少ない」

「いやいや、勉強と経験は仕方ないですけど、別に種類は多くなくてもいいと思いますよ?」

魔法学校で卒業までに覚えなくてはならない基本魔法は二つ。それ以上は、各々で練習したり、両親や教師から教わってもらったりする。

データを見たところ、最低限の魔法である「魔法の射手」と「武装解除」は覚えている。

他は高畑に教わったのか、明日菜は「戦いの歌」に感化法、木乃香は多種の回復魔法。

裕奈が魔法銃での射撃訓練、美空は他の基礎魔法をいくつか。

「とりあえず、この四人に足りない物は分かったから、それを主体に教えるよ」

「ウチらに足りないものって何なん?」

「それはズバリ、火力です!」

「はっ!」

ネギの指摘に、木乃香は軽くショックを受けた。

そして頭に過ぎる、クラスメイトと自分が使える魔法の効果。どれをとっても、圧倒的に火力が不足しているのは明らかだ。

それに気付いた木乃香は椅子から降りて、がつくりと膝を着いた。突然のその行動に、ボディガード兼親友の刹那が慌てる。

「お、お嬢様!?!」

「そや、すっかり忘れとった。ネギ君やせつちゃんの怪我を治したいから、治癒系ばっか覚えとったから、火力での手助けが頭から抜けとった」

今になって気づいた弱点に、自己嫌悪に陥る。

木乃香が発する暗い空気は刹那を慌てさせ、周囲を不安にさせた。

「おい近衛、大丈夫か？」

「……………この暗い空気、トモダチに食べてもらおう？」

どこから湧いて来たのか、いつの間にかザジの周辺にいるトモダチとやらが大多数。

あーとかうーとか言いながら、暗い空気どころか皆を食べてもいいかと聞いてくる。

ネギが首を振るとザジが食べちゃ駄目と返し、トモダチとやらは残念そうに消えていった。

(ホントあれって、何なんだろう?)

相変わらず意味不明な生命体を見送りつつ、改めてそう思うネギであった。

そうしている間に、拳を握り締めた木乃香が立ち上がり、高々と宣言した。

「決めたで、せつちゃん。ウチ、最強火力を誇る魔砲少女になったる！」

「ちよっ、お嬢様？ お嬢様に火力は似合いません。そういうのは明石さんとか明日菜さんに任せておきましょうよ。そもそも、法が砲になってますよ!？」

下手をすれば、全く別の魔法物になりそうな事態に慌てるのは刹那だけ。

そしてその勢いのまま、コウキが持ち込んだ飲み物や菓子で宴会が始まる。

そんな状況と今後の事を考えたネギは、午の紅茶を手に、遠い地

にいる両親に心の中で告げた。

(父さん、母さん。僕、強くなれそうといつか、強くならなくちゃ
いけなそうです。色々)

こうしてネギの来日初日の夜は更けていった。

突撃 教職員寮の晩御飯の席（後書き）

今回はこれまでです。

次回からいよいよ学園生活が本格的に始まります。
どうぞ、お楽しみにしてください。

教師初日

来日から三日目の朝を迎え、始業式に出席するネギは鏡の前で背広姿を確認する。

お祝いに従姉が買ってくれたネクタイを締め、襟元を直して大きく頷く。

「よし、今日から頑張るぞ」

初めて迎えた教師としての朝、気合いを入れたネギは昨日までを振り返る。

来日初日、色々あったために黄昏ながらも、引越しの片づけは終了させた。

しかしその後、不味い蕎麦を食べて遊び呆ける。

二日目、午前中は高畑の見舞いと日用品の買出しに出かけ、午後は親戚になった龍宮家に挨拶をするため、龍宮神社に行ったら何故か宴会に発展。

笑い上戸の従姉に酒を飲まされそうになる前に辛うじて脱出。帰宅したら疲労のためにそのまま就寝。

要するに大した事はしていない。

「……うん、全力で気持ち切り替えよう」

ここ二日の行動を頭から捨て去り、今日これからの事にだけ集中する。

入院中の高畑から聞いた2-Aの情報を整理し、必要だと思つものを何点か鞆に入れておく。

「これくらいでいいか。おっと、そろそろ行かなくちゃ」

時計の時間を確かめ、早足に教職員寮を飛び出す。

こうしてネギ・スプリングフィールドの教師生活は幕を上げた。

「という訳で。彼が入院した高畑先生に代わって2・Aの担任をしてもらう、イギリスから来た教育実習生。ネギ・スプリングフィールド君じゃ」

始業式の場で高畑の入院を伝え、同時に代行の教育実習生という形で紹介されたネギ。

挨拶をするために壇上に行くと、女生徒達の悲鳴にも似た黄色い雄叫びが学内に響き渡る。

騒いでいないのは、極一部ではなく極一人の高畑ファンのツインテール少女と、他数名の生徒達だった。

勢いに圧倒されたネギは無難な挨拶で済ませ、そそくさと壇上から降りた。

「ふおっふおっふおっ。いきなり人気者になったのお、ネギ君」

「てつきり奇異な目で見られると思ったんですけどね」

式後に学園長室を訪れ、細かい説明の合間に先ほどの入学式の事を話す。

あの後、退場するネギに女生徒達が悲鳴を上げていた。

中には少しでも近づいて触れようとして、教員達の間を割って入ろうとした生徒まで。

「早くも学園のアイドルじゃな」

「ふざけた事言っていないで、早く説明の続きを。でないところ自慢の髭と丁髷ちやんまげを力ずくで塗り取りますよ？ ついでに眉毛も一緒にいかがです？」

魔力を纏って黒い笑みを浮かべると、慌てて詳細説明の続きを喋りだす。

焦っているせいか、所々で詰まっているがどうにか説明を終える。

「では最後に、君の教育係を紹介しよう。入りなさい」

学園長の呼びかけで扉が開き、一人の女性教師が入室する。

「初めまして、源しずなです。よろしくね」

服の上からでも分かる豊満な胸と、母性溢れる雰囲気撒き散らし、
て笑みを見せる教師、源しずな。

思春期の男にとっては、魅力的な要素をこれでもかと詰め込んだ感じだ。

「あつ、こ、こちらこそよろしくお願いします」

「彼女は日本文化にも詳しいからの。君が間違っ
て覚えている、日本文化の修正役でもある」

「それは大変ありがたいですね」

寧ろ学園長としては、そっちがメインだったりする。

生徒の前で変に覚えている日本文化を晒されては、色々と困るがゆえに。

「じゃあネギ君、行きましようか。教室まで案内するわ」

「はい」

案内するしずなの後を追って、ネギが学園長室から出て行く。

廊下に出て早速渡されたのは、クラス名簿。

しかも前任の高畑が用意してくれたのか、ご丁寧にも顔写真と所属クラブ等が記載されている豪華版。
ただし、エヴァンジェリンという名前の下の記述は、後になって書き換えたようだ。

(何かあったら相談しなさいが、何かあったら学園長に相談しなさいになってる)

あったら、と相談の間に矢印と学園長にという一文が後から加えられている。

入院前に書いたのか、入院後に書いたのかは不明だが、気持ちはありがたく受け取っておこうと思うネギだった。

「どうかしたかしら？ ひょっとして、可愛い子ばかりだから見惚れちゃった？」

「あっ、いえ、そういうんではなくて」

「照れなくていいのよ。年頃の男の子だもんね、無理もないわよ。でも、教師という立場は弁えてね」

「勿論です」

「それならいいわ。さっ、ここが教室よ」

案内されて辿り着いた、2・Aの表札がある教室。

教室内では女生徒達が雑談を交わしたり、肉まんを配ったり、何かを仕掛けたり、それを止めようとしている。

「さっ、どうぞネギ先生」

入室を促され、いざ乗り込もうと手を伸ばしかけたところで、ネギはある事に気付いた、

何故か、入り口の扉が中途半端に開いている。

もしやと思い上の方を見ると、お約束の黒板消しトラップが仕掛けられていた。
しかも先ほどの教室の様子からして、別の罠も仕掛けてあると思われる。

後ろを振り向いて罠を指差しても、しずなは笑顔を向けるだけで何かをしようとはしない。

(これもまた、試練なのかな?)

溜め息を吐いたネギだが、その聡明な頭にある行動が思い浮かぶ。その行動をした際の生徒の反応を考えて不適な笑みを一瞬浮かべ、すぐに表情を戻して扉をノックする。

ノックの音に教室内は静まり返り、生徒達は扉が開くのを待つ。

一年生の時に高畑は、同じような罠を軽く突破した。

ならば、今度新しく赴任して来た、あのイケメン教師はどうか。
ネギの事を知らない面々は興味深そうな顔で、ネギを知る者はわざと引っ掛かるのか、それとも避けるのかを気にしている。

「失礼します」

廊下からの声と共に扉が開かれ、黒板消しが落下。

それを簡単に手でキャッチする。

「残念でしたね。こんな不自然に扉が開いていれば、誰でも気付く罠」

笑顔で喋っている最中、ネギの足が何かに引っ掛かってしまう。

縄に足が引っ掛かったので体勢が崩れた処へ、連動してバケツが落下して頭部に直撃。

そしてとどめとばかりに、おもちゃの矢が三本背中に撃ち込まれる。

さらに、体勢が崩れた勢いで頭を教卓にぶつけてしまう。

「はぶっっ!!」

見事に罨にかかったので、教室内は爆笑に包まれる。

ただし、ネギを知る者達はいい音を立てて教卓に頭をぶつけたので、大丈夫かと心配する。

「あらあら、手荒な歓迎ね。大丈夫ですか、ネギ先生」

こんな時でも大人の対応を見せるしずなだが、反応が返ってこない事に首を傾げる。

「ネギ先生？」

どうかしたのかと体を揺するが、それでも反応は無い。ひょっとして頭を打ったせいで気絶したのかと、体を仰向けにさせる。

仰向けになったネギは、目を閉じて力無く首を横に向けている。

「ネギ先生。大丈夫ですか、ネギ先生」

生徒達も心配になって集まってくる中、何度しずなが呼びかけても反応は無い。

「亜子、保健委員なんだし、ちょっと見てあげなよ」

「えっ？ あっ、う、うん」

ネギの顔に見惚れていた、このクラスの保健委員、和泉亜子。友人の呼びかけで前に出て、しずなと共にネギの具合を確かめよう

とした時だった。

呼吸はあるかと口元に手をかざした瞬間、亜子の表情が変わった。もしやと思い、鼻にも手をかざす。

そして、顔色が真っ青になって悲鳴を上げる。

「ひゃあああああつ!?!」

「ど、どうしたの?」

突然悲鳴を上げて後退し、机に体をぶつけた亜子にしずなが問い掛ける。

周囲も気になる中、亜子は声を震わせて答えた。

「ネ、ネギ……センセ……息、しとらん」

発言を聞き取った瞬間、教室内が沈黙に包まれる。

しばしの沈黙を経て、事を理解した教室内は悲鳴と騒動に支配された。

「きゃあああつ!」

「春日、鳴滝姉妹! 貴様ら、なんとということ。義姉さんになんと説明すればいいんだ!」

「ちよつ、私達だってまさかこんな事になるなんて! ていうか、銃引つ込めて!」

「御三方、覚悟はよろしいか。あなた達には、これから夕風の錆になってもらいます」

「びいびいっ! 史伽、逃げるよ!」

「お姉ちゃん、私は逃亡なんて嫌です。潔くお縄に掛かるです」

「殺される……アリカ叔母様に殺される……。ガトウさん、今までお世話になりました。高畑先生、最後に一目会いたかったです」

完全にパニックになる教室内。

唯一の大人であるしずなも、顔を真っ青にして完全に固まっている。こうして混沌の状況のまま、今作のネギまは終わる。はずがない。

「はあ、よく寝た」

いきなり体を起こして発言するネギに、教室内がフリーズする。

事を出来ない様子を察したネギは、何事もないように立ち上がって黒板に大きく日本語で文字を書いた。

ドッキリ大成功、と。

「いやあ、入り口に何か仕掛けられているのは分かっていたので、僕もちよつと仕返しと言っかなんというか。如何でした？」

ようやく事を理解した教室内に、安堵の溜め息が漏れる。

「ネ、ネギ先生。冗談が過ぎますよ」

「あはは、すみません。英国ジョークって事でどうかひとつ」

「許せるかあ！」

笑って頭を掻くネギに、どこから取り出したのか明日菜がハリセンで頭を叩く。

教室中どころか、学校中に響きそうな音を発した一撃に、ネギは頭を押さえる。

「痛いですが、明日菜叔母……」

「だあれが叔母さんかあ！」

「そんな事言われても、戸籍上は母さんの親戚で、僕にとっては叔母という立ち位置に」

「だからって、叔母さん言うなあ！」

呼ばれたくない呼ばれ方をされたせいか、再度ハリセンがネギの頭に落ちる。

「うう……明日菜さんの力だと、ハリセンでも凶器ですね」

「だあれが馬鹿力ですってえ！」

「アスナ、そこまで言うてへんで」

三発目は寸での処で木乃香に止められ、そのまま明日菜はクラスメイトの手で席に戻された。

「ええ、では改めまして。三学期の間、教育実習生をすることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。どうぞよろしくお願います」

教卓に出席簿を置き、改めて自己紹介をする。

生徒達は先ほどのドッキリで未だに放心状態だった者もいたが、ネギが歯も光るような笑顔を見せると正気に戻った。

「いい、やっぱりかつこいいー！」

「先生、宿題忘れてきたら御仕置きしてえー！」

「先生が直々にお願ひしまあす！」

一部から上がるそんな声に、苦笑いを浮かべて声の主を出席簿で探す。

最初のは柿崎美砂、続いて椎名桜子、そして最後に佐々木まき絵。更に三人に続いてあっちこっちからも歓声上がる。

「はい、皆さん。そろそろ落ち着いてください。隣のクラスに迷惑

ですから」

手を叩いて生徒達を静かにさせ、一度周囲を見渡してから出席簿を手にする。

「ではこれより、皆さんがお待ちかねでしょうから、僕への質問タイムとします。ただし！」

早速手を上げる準備をした生徒が大勢いたが、ただしという言葉に手が止まる。

何を言うんだと、期待と不安が半々な生徒に向けてネギはこう言った。

「僕の事を知ってくれても、僕が皆さんの事を知らないというのは少し問題だと思っんです。なので、僕に質問した方へ僕からも質問をしますので、そのつもりで挙手してください」

要するに、質問していいのは、質問される覚悟のある者だけということだ。

しかし、この程度で怯む2 - Aではない。早くも数名の手が挙げられている。

「では……七番の柿崎美砂さん」

「はい。先生は彼女いますか？」

「今のところ、そういった特定の女性とは付き合っていないません」

この返答に、教室内に黄色い声が飛ぶ。

「では、今度は僕からの質問です。一番仲のいいお友達を教えてください」

「へ？ そんな事でいいんですか？」

「ええ。教師として、生徒の友人関係を知るのも重要ですから。あと、できれば出席番号とフルネームもお願いします」

一瞬呆気にとられるはするものの、おかしな点は一つもない。

言い分も間違っではないので、とりあえず答えることにした。

「十一番の釘宮円と、十七番の椎名桜子です」

告げられた名前を出席番号と照らし合わせ、顔と席の位置を把握する。

目が会うと円は頬を染めて目を逸らし、桜子は笑顔で小さく手を振る。

「では次の方は……十六番の佐々木まき絵さん」

「はあい！ 先生の趣味は？」

「紅茶とアンティークを少々。では佐々木さん、寮で同室の方はどなたですか？」

「亜子だよ。和泉亜子」

先ほど同様に出席簿で確認し、本人を視認する。

目が会った時に小さく笑みを浮かべると、亜子は顔を真っ赤にしてしばし呆ける。

「じゃあ次は。そうですね、三番の朝倉和美さん」

「待ってました！ ねえ先生、質問はいくつでもいいの？」

「いいですよ。その代わり、こっちからの質問も増えますけど」

「了解！ じゃあまずは、お生まれはどちらで？」

どこから取り出したのか、ボイスレコーダーを教卓に置き、メモ帳

とボールペンを手に持つ。

「ウェールズっていう地方にある、山の中の田舎です。朝倉さんの好きな食堂のメニューは？」

「オムライスです。日本語がお上手ですけど、誰かに教わったんですか？ それとも独学で？」

「主に両親とその友人に教わりました。このクラスのムードメーカーはどなたですか？」

質問の応酬をする二人に、周囲からはどよめきが上がる。

報道部所属の朝倉和美の追及は深く激しい。

それに付いて行くどころか、互角に渡り合っている。

だが、ここにネギの罠があった。

それはどんな罠かというと。

「フィッシュ&チップスは個人的にはまあまあ好きですね。そういえば忘れていましたけど、先ほどの罠を仕掛けたのは？」

「美空と風香と史伽です。じゃあ次……は……」

これまで通りに機械的に質問に答えた後に、彼女も気付いた。ひよっとしてやっちゃたのかと。

ずっと手帳に向けていた視線を上げると、ネギが満面の笑みで出席簿を眺めていた。

それも笑顔なのに、どこか殺気の籠った雰囲気です。

続いて、たった今自分が暴露した三人の方へ視線を向けると、美空と風香から恨みがましい視線を浴びる。

残る史伽は、涙目でどうにかしると訴えてくる。

ここで彼女がとった行動は、視線を外して無視する。

いかに真実の探求者たる朝倉も、こればかりは現実逃避してしまっただけだ。

「なるほど。あなた達でしたか、先ほどの罫の仕掛け人は」

仕掛け人の三人に目を向け、にっこりと腹黒く微笑む。

「三人は後で職員室に来てください。来なかった場合は「
ば、場合は？」

指名された三人だけでなく、生徒一同とせずなも唾を飲んで次の一
言を待つ。

そしてネギは、満面の笑みでこう言い放った。

「思いつく限りの、精神的苦痛を味わってもらいます。法に触れな
い範囲で」

「「「喜んで行かせてもらいます!」「」」

机の上に額を擦りつけるように頭を下げ、全員の前で行くと宣言。

ネギの策と三人の態度で、教室内はにわか賑やかになる。

そんな様子に大きく息を吐いた龍宮は、窓の外に目をやって心の中
で呟いた。

(ネカネ義姉さん、あなたの従弟は変な方向に強くなりそうです)

こうして、ネギの教師生活は始まりを告げた。

教師初日（後書き）

今回はここまでです。

次回はちよっと思いついた番外的小話を書こうか、予定通り本編を書こうか、ちよっと考えています。

魔法授業と歓迎会

午前中のごたごたも終わった放課後。

敷地内の林の中に人払いと認識阻害の結界を張り、そこにネギと2

- A魔法生徒四人、プラスアルファが集まる。

「ええ、皆さんも知つての通り、今日から僕があなた達の魔法指導をすることになりました」

「よろしゅうな、ネギ君」

「よろしくね！」

元気に返事を返す木乃香と裕奈に対し、明日菜は少し不機嫌そうな表情を浮かべ、美空はやけにくったりしている。

しかも首からは、私はネギ先生に罾を仕掛けた愚か者です、と書かれたプラカードを下げて。

「あの、明日菜さん？ 何か問題でも？」

「アンタより、高畑先生が良かったってだけよ」

ぶっきらぼうに返事をして、そっぽを向く。

不機嫌な理由がよく分からないネギに、木乃香が耳打ちする。

(アスナは高畑先生が好きなんよ)

(ああ、なるほど。それで)

とはいえ、その高畑は未だに入院中。

近く退院は決まっているが、復職しても担任からは外れる。

つまりは、彼に指導してもらう機会は今後、個人的に申し込んだ時に限定されるという事だ。

そんな理由で不機嫌な明日菜に、ネギの隣に立っている女性が眼鏡の位置を直しながら注意する。

「神楽坂さん、彼は仮にも魔法学校を卒業したんですよ。少なくともあなたよりは上の立場なんですから、その態度は止めなさい」

「……はい」

たった今、明日菜に注意をしたのは魔法指導の際のネギの教育係の魔法先生。

名は葛葉刀子。

正確には魔法使いではないのだが、それに匹敵する実力と技を修めている。

勿論、学園長が指名したので日本文化には詳しい。

ちなみに、何故彼女が教師としての教育係ではないのかというと、現在の彼女の受け持ちが高等部だからだ。

「ほら、春日さんももっとシャキっとしなさい」

「無茶言わないでくださいよお。ついさっきまで、ネギ先生にお説教されていたんですから。しかも、こんな物まで……」

始業式という事で学校は早めに終わった。

しかし、悪戯の犯人である美空を含む三人は、ホームルーム後に職員室でネギの説教を受けていた。

さらに説教の後、罰として三人には美空が付けているようなプラカードが進呈された。

当然、所属しているさんぽ部に向かった鳴滝姉妹も、同じ物を首から下げている。

これを外せるのは、翌朝のホームルーム時。

「うう。しかも日本の説教というものは、正座で受けさせるものだ

って言うから、床に正座させられて……」

「以前母にそう教わったもので」

「……ネギ先生、日本だからといって、必ずしも正座で説教を受けさせなくてもいいんですよ」

「あはは。それ、しずな先生にも注意されました」

苦笑いして頭を掻く様子に、何故自分が指名されたのかを実感した刀子。

「そもそも、あんな手段使わなくとも、死んだ振りしている時に私達の名前、聞いていなかったんっすか？」

「周りの騒ぐ声が煩くて、聞き取り辛かったんですよ。聞き取れた名前が、みうか、ですよ？」

おそらくは、美空、風香、史伽の順に一字ずつ聞こえたのだと思われる。

それじゃあ犯人の断定は無理だと、怒られた美空も納得する。

「では、雑談はこの辺りにして、今日の魔法授業を始めましょう」

青空教室さながらの野外での実地授業。

今日は四人の魔法実地に関する簡単なテストと、これまでの復習だけに終わった。

授業後、ネギは刀子とダビデ像前で授業の報告書を纏める。

同様に刀子は、ネギの魔法授業に関する報告書を纏める。

「思ったよりも順調ですね、授業の進行は。まさかあの不器用な明日菜さんが、基礎魔法は全て修めているなんて、実際に目にするまで信じられませんでしたよ」

「そういえば、神楽坂さんとは母方の親戚でしたね」

「ええ。昔はすごいお転婆で、遊びに付き合わされる僕と友人は大変でしたよ」

お転婆な明日菜をすぐに想像出来たのか、刀子の顔に笑みが浮かぶ。同時に、付き合わされるネギの姿も想像しているとは、本人以外は誰も知らない。

「随分楽しそうね、刀子」

そこへ、以前にネギと会ったココネという少女を連れた褐色肌のシスター、シャークティーが現れた。

さらにその後ろには、高等部の制服を着た魔法生徒、高音・D・グッドマンと中等部の佐倉愛衣の二人がいる。

「あら、シャークティー先生。魔法授業が終わったんですか？」

「ええまあ。ところで、そちらがネギ・スプリングフィールドさんですね？」

「あつ、はい。初めまして」

「こちらこそ、初めまして。それと、以前に私のところの子が失礼しました」

どういう意味かと首を傾げると、シャークティーの陰から顔を覗かせているココネと目が合った。

同時に、あの時のサインの事を言っているのだと理解した。

「いえいえ、いいんですよ。気にしないでください」

「そう言われましても……。ともかく、一言お詫びを入れさせてもらいます」

ココネの頭に手を置き、二人揃って頭を下げる。

その後、双方で自己紹介をして雑談を始める。

「へえ、佐倉さんはアメリカのジョンソン魔法学校に留学経験が。しかも評価がオールAですか」

「は、はい」

「向こうの評判はよく聞きますよ。最近では魔力の運用効率について、新しい論文が出されたそうですね」

「私もメルディアナの評判は聞いています。そういえばネギさんは術式統合他、いくつもの技法を編み出して、それらについての論文を書かれたとか」

「ええ。何年か前に父の友人との勝負に勝つために編み出したんですけど、母に言われて特許の申請をしておいたら、いつの間にか貯金が凄い事に」

ここから始まる、天才同士のディープでマニアックな会話に、段々と周囲は付いていけなくなる。

最初こそなんとかついていけたが、話が盛り上がるにしたがってクエスチョンマークを浮かべながら、頷く事しかできない。

勉強のためにとメモを取っている高音とココネも、話に付いて行くのが精一杯になっている。

特に訳が分からないのは、魔法とは縁の浅い刀子である。

(付いていけないなんてレベルじゃないわ。ぜんっぜん分からない)

(ちよっ、この二人、私より頭いいんじゃないのかしら?)

苦笑いを浮かべる刀子と、魔法教師としての自信が揺るぎ始めるシヤークテイー。

この日の夜、とある居酒屋でこの事について愚痴を零す二人の姿が発見される。

「いやあ、実に有意義な時間でしたよ」

「いえいえ、こちらこそ。貴重なお話をいくつもしてもらい、ありがとうございました」

やっと二人の話は終わったが、聞いていた側は既に半分グロッキー。頭の処理が追いつかず、オーバーヒート寸前になっている。

ただ一人、付いて行けずに途中でメモを放棄し、蟻の巣の近くに飴玉を置いて観察をしているココネを除いて。

「や、やっと終わりましたか」

頭脳にはそれなりの自信があつた高音も、さすがに疲れきっていた。

「あれ？ 皆さん、どうしたんですか？」

「どうしたんですかって、一時間以上もあんな話をさせていては、聞いている側が疲れるに決まっています！」

時間を確かめると、話し始めてから一時間半が経過していた。

それでもこの場に残っている辺りに、律儀さが窺える。

「……お話終わり？」

蟻の観察をしていたココネも、話が終わったために戻って来た。

「ええ。それでは、私達はそろそろ失礼します」

「ネギ先生、今度はゆっくりとお話を」

「はいはい。いいから行きますよ、愛衣」

約束を取り付けている最中、無理矢理連れて行かれる愛衣の目には、残念な涙が溢れていた。

そんな四人を見送り、ネギと刀子は報告書を提出するために学園長室へ向かおうとする。

するとそこで、一人危なっかしい生徒を見つけた。

「あれ？ 確かあの子は、僕のクラスの……」

ネギの視線の先にいるのは2-Aの生徒の一人、宮崎のどか。

山積みの本を持って、覚束ない足取りで歩いている姿は危なっかしい。

しかもその先には階段。

「刀子先生……」

「はい。間違いなく、私達は同じ事を考えていますね」

目を合わせてお互いに頷き合つと、即座に周りを確認し、それぞれ魔力と気で脚力を強化して階段下へ駆け出した。

そして案の定、階段を二、三步降りた処でのどかは足を踏み外して落下する。

「ていうか、何でそんな端っこを歩くんですかあ！」

「そんな事より、早く彼女を！」

刀子の叫びに反応して、ヘッドスライディングしながら頭から飛び込む。

発見が早くスタートも早かったお陰か、辛うじてキャッチした。

続けて落ちてきた本は、ネギかのどかに当たりそうな物だけ、刀子がキャッチする。

衝撃が来るだろうと目を閉じていたのどかだが、思ったよりも衝撃が弱いのでおそろおそろ目を開ける。

「ひやつ、ネ、ネギ先生!？」

「あはは。大丈夫ですか、宮崎さん」

「ネネネ、ネギ先生こそ大丈夫ですか!？」

「ええまあ。鍛えていますので」

のどかが腕の中から降り、立ち上がったネギはスーツの汚れを手で払う。

次いで刀子が、拾い集めた本をのどかに差し出す。

「はい、これ。危ないから、今度からはこんなにたくさん運ばないようにね」

「あつ、はい。どうもすみませんでした」

普段から交流の無い高等部教師の刀子との会話だけに、声に緊張の色がある。

そのまま分かれようとした時、のどかがある事を思い出しす。

「あ、あの、ネギ先生。この後は空いていますか？」

「ええ。学園長先生に今日の報告書を提出すれば、後は空いていますけど」

「でしたら、後で教室に来てくれませんか？」

「教室ですか？ 分かりました、伺わせてもらいます」

了解の返事をする、本を持ったのどかは丁寧に頭を下げ、先ほどと同じく覚束ない足取りで去って行った。

また転ばないかと、ヒヤヒヤしながらネギと刀子も報告書の提出に向かう。

無事に提出を終えて刀子とも別れたネギは、早足に教室へと向かう。教室に着くと、中からは生徒達の賑やかな声が聞こえる。

念のために罫が無いかを魔法で確認し、おそるおそる扉を開ける。

すると、扉の開放と同時にクラツカーの音と歓迎の声が鳴り響いた。

「ようこそネギ先生！」

生徒達のサプライズに、一瞬ネギはきよとんとしてしまつ。

「えっ？ えつと、これは？」

「ネギ君の歓迎会や」

「さつ、主賓はどうぞ真ん中の席へ」

ネギがまだ混乱しているうちに木乃香と刹那が引つ張り、真ん中の席へと座らせられる。

目の前にはジュースとお菓子、それと点心類が多数並べられている。

「ええつと、つまりこれは僕の歓迎会だと？」

「さつきからそう言っているじゃないですか、先生」

「どうぞ、好きなように飲んで食べてください」

近くにいた千鶴とあやかにそう言われ、取り敢えずは近くにあつた水餃子を口にする。

なんでこんなな點心があるんだろうという、微かな疑問は食べた瞬間に吹き飛んだ。

「お、美味しいです、これ」

「おおつ、分かる力先生。やっぱり旨い物は、万国共通で旨いネ」

蒸籠を手に教室内を回っていた超と五月がやって来て、肉まん入りの蒸籠を置く。

「これもどうぞ」

「ありがとうございます。うわっ、これも本格的ですね」

「ムツ？ 先生は中国に行った事あるの力？」

「両親と二、三度。個人的には、広州料理が一番気に入りました」

「分かっているヨ、先生。食は広州、これ基本ヨ」

楽しそうに喋るネギと超だが、その様子を不機嫌そうな目で見ている面々がいる。

それは両親にネギとの仲を公認されている木乃香達四名。

嫉妬感を覚えた彼女達は互いに頷き、席を立つ。

そして。

「失礼する」

わざと超の前を横切って、まずは龍宮がネギの右隣に陣取る。

続いて無言で刹那が左隣を陣取り、ザジはネギの背中に押し掛かる。それだけでも周囲から好奇な目を向けられているというのに、トドメとばかりに木乃香が何事もないようにネギの膝の上に座る。

「……あの」

「何だ、ネギ君。質問は受け付けないぞ、少なくともこの状況に関する事はな」

龍宮の言い分に、他の三人もうんうんと頷いて同意。

どうするべきかと悩むネギに、目を輝かせた朝倉からボイスレコーダーが向けられる。

「ネギ先生、この面々とはどういったご関係で？」

「えっ、ええっと、親同士が知り合いで幼い頃に面識があつてですね、それでその」

『嫁になる予定』

四人揃って発した言葉に、教室内の騒ぎが一瞬で収まる。

そして次の瞬間、関係を深く聞かためたために生徒達が殺到。

お呼ばれしたしずなは、ネギを助ける事もなく、ただ笑って傍観していた。

その一方で、クラスの様子を無機質な目で見ている生徒もいた。

「マスター、現在の計画では、あの四名に参戦される恐れがありません」

「ふむ、それは厄介だな。ただでさえ、叔母の神楽坂明日菜もいるというのに。茶々丸、帰ったら計画の見直しだ」

「イエス、マスター」

出席番号二十六番のエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルと、出席番号十番の絡操茶々丸。

かつてネギの父であるナギにこの地に封印され、十五年も中学校に通う残念な親祖の吸血鬼と、その従者である。

彼女達がネギと接触する日は近い。

魔法授業と歓迎会（後書き）

今回はここまでです。

次回は彼を交えた、番外的小話の予定です。

番外編 F氏の日常

魔法世界、それは火星に存在する、魔法使い達が暮らす一般人には知られていない世界。

火星に作られているこの世界も、一時は崩壊の危機を迎えた。

しかし、かつての英雄達と、彼らの連れて来た次代を担う少年少女達の協力により、無事に事態の回避に成功。

それ以来は、誰もが以前と変わらぬ生活を送れている。

そんな魔法世界にある、とある小さな集落にある一軒の家。

住人は最初、仲の良い姉妹だったのが、今では新たに一人の少年を迎えて三人で暮らしている。

「コーヒーのお代わりは如何です？」

リビングで手紙を読んでいる少年、フェイトに話しかける女性。

その女性にお願いしますと言って、空のカップを差し出す。

女性は微笑んでカップを受け取って、彼に気に入られているコーヒーを淹れる。

「どなたからのお手紙なんですか？」

「ネギ君だよ。新しい修行先が決まったらしいからって、手紙を送ってきたんだ」

手紙を読み終えたフェイトは、添えられていた写真に目を写す。

歓迎会の時に写された、生徒達との写真。

似たような年頃の少女に囲まれたネギを見て、深く溜め息を吐いた。

「この写真は、ルーナさんには見せられないね」

「どんな写真なんですか？」

「はい、どうぞ」

手渡された写真を見て、女性は小さく笑みを浮かべる。

「どうぞも。……あらあら、確かにこれを見たらあの子、すごく嫉妬しそう」

「僕もそう思うよ」

写真と交換で受け取ったコーヒーを啜りながら、大きく息を吐く。

「どうかなさったんですか？」

「いや、僕と彼があなた達と出会って、もう五年くらい経ったんだなと思って」

フエイトのこれまでの十五年は、色々あった。

自分達の組織が敗北し、壊滅したために自分達はいつまでも目覚めずにいるのだと思っていた。

ところが、何者かの手によって棺が開けられ、眠ったままどこかへ連れ出された。

それからどれだけの長い時間が過ぎたのか、目覚めたら他の未完成体ともども、人間の赤ん坊になってベビーベッドに寝ていた。

どういう事だと叫びたくとも、上手く言葉が出ない。

「おや、目覚めたみたいだね」

「あっはっはっ！ おはよう、テルティウム。我が弟よ」

話し掛けた二人を見て、直感的に感じ取った。

自分のそっくりのこの二人は、自分の前に作られた人形だと。

背の高い落ち着いた表情なのが一番目のプリームム、陽気に笑っているのが二番目のセクンドウムだろうと。

しかし、何かがおかしい。

「おう、三番目の奴も目が覚めたのか」

そこへ現れたのは、宿敵のはずのナギ。

そのナギに抱かかえられて別室へ連れて行かれると、そこには赤ん坊のネギを抱えたアリカがいた。

「ほれ、どうだ。こいつが俺の息子だぞ。俺に似ていい男になるぞ」

いきなり息子自慢されても、どう反応すればいいのかが分からない。それ以前に喋れない。

声を出そうとしても、うーとかあーしか言えない。

同様にネギもうーとかあーとか言って、興味深そうにフェイトに両手を伸ばしてくる。

「という訳で、お前とその弟と妹は今日からネギの友達な」

何の前触れも無くそう言われ、ネギ共々ベビーベッドに寝かされる。これからどうなるのか、そんな事を考えて数時間が経つと、フェイトはナギに抱えられて別室へ連れて来られた。

室内には既に、プリームムとセクンドウム、そしてアリカが待っていた。

「よお、起きてるか、テルティウム」

「あう」

フェイトは返事のもりで返事してみたが、やはり言葉にならない。

それでも声を出せば、向こうにとっては問題無い。

「よし、起きてるな。そんじゃ、なんでお前らが人間になつていか説明すつぞ」

いきなりの展開に付いていけるか不安に思いつつも、フェイトはこの状況を理解した。

自分達が人間と化しているのは、グランドグレートマスターキーの力。

これを永久に封印するには内にある力を全て使う必要があり、それを効率的に行なえる方法が、フェイト達を人間化する事だった。

元々、旧世界にも行けるように人間に近い状態で作られていたので、さほど難しい作業ではなかった。

しかしプリームムだけでは足りず、眠っていたセクンドウムからセクストウム、唯一無事だったデユナミスを始めとする使徒も引き摺り出し、人間化に力を使用してようやく封印できた。

ただ、クウアルトウムからセクストウムは未完成だったらしく、フェイトのように植えつけられた知識はなく、本当に人間の赤ん坊そのものになつてしまった。

「という訳だ。戸籍はアルとガトウがなんとかしてつから、しばらくここにいろや」

「なんとかできるのかい？」

「あいつらは顔が広いからの。まあ、いざとなつたら我の昔のツテを使うがな」

数日後、無事に人数分の戸籍できたとガトウからの連絡がきた。

こうして、人間としてのアーウェルンクス六兄弟の生活が始まった。

「いやあ、あの頃は愉快だったよ。近所のガキ大将になつたセクンドウムとか、アリカ姫と一緒に家事を習うプリームムとか」

「そうなんですか。フェイトさんはどうしていたんですか？」

いつの間にか真向かいに座っている女性を前に、コーヒーを一口啜って話を続ける。

「僕は赤ん坊だったからね、兄の様子を面白おかしく見物していたよ。他の兄弟とネギ君と、幼児用の玩具で遊ばされながらね」

当時の事を思い出し、フェイトは微かに微笑んだ。

「遊んでいた。じゃなくて、遊ばされていた。なんですね」

「まあね」

それはそれで楽しくもあつたのは、今ではフェイトだけの秘密である。

「それで、その後はどうなったんですか？」

「しばらくしたら、上の兄二人は村を出て行ったよ。プリムムはクルトって人と政治の勉強をしに本国へ、セクンドウムは使徒数人と一緒にラカンの所に居ついて拳闘で金稼ぎ。僕と弟達はもう数年ほど村に住んでいたよ」

その後、ある程度の成長をしたらアーウェルンクス兄弟はそれぞれ別々の道を歩みだした。

フェイトは村の警備のようなことをしながら、元々の知識を下に魔法や体術の自主練。

そんなある日、ちよつとした事情からネギと魔法世界へ行き、そこで喧嘩が勃発。

あつちこつち飛び回りながら喧嘩した結果、この集落の近くで互いに力尽きた。

それをここの姉妹に助けられて以降、色々あってフェイトはこの家に集落の用心棒として住み着いた。

クウアルトウムは旅に出たセクンドウムと入れ替わるようにラカンの下へ赴き、拳闘士の修行を開始。

クウイントウムは知識を深めたいと言い出し、本国の魔法研究機関の付属校へ。

セクストウムはネギを追いかけてメルディアナ魔法学校へ行こうとしたものの、願書の提出が間に合わず、結局本国のアリアドネーへ入学。

ネギとの学校生活を妄想していたセクストウムは、出発の日までいじけていた。

「今はどうしているんでしょうね？」

「風の噂では、明日がクウアルトウムのデビュー戦らしいよ」

「見に行かないんですか？」

「見に行ったらあなたのコーヒーがしばらく飲めなくなる。それだけは嫌だ」

惚気とも思える発言だが、当の言われた本人は照れても困ってもない。

そんなに気に入ってくれたんですかと、笑顔で対応している。

「ではいつそ、二人で行きますか？ 勿論、コーヒー豆とある程度の道具を持って」

「……その手があったか」

「じゃあ、ついでにちよつと旅行でもしましょうか」

「いいね、じゃあ相応の身支度はしないとね」

話が纏まり、そそくさと準備を始める。

妹のために置手紙を書くと、二人は早速出かけていった。

その一時間後、学生服のような衣服を着たルーナという少女が帰宅する。

「ただいま、姉さん。ごめんね、ちょっと遅くなっちゃって……」

ふと家の中を見渡すと、人のいる気配がない。

姉の姿も、居候している少年の姿も。

出かけているのかと、自室に向かう最中に置手紙を見つける。どうしたのかとそれを手にし、読んでみると。

ルーナへ

フェイトさんの弟さんが拳闘士としてデビュー戦を迎えるらしいので、二人で応援に行つてきます。

ついでに旅行もするので、帰りは一週間後になると思います。

あなたは学校もあるし、お留守番ね。

お土産はちゃんと買って来るから、頑張ってお留守番していてね。

読み終わったルーナはがっくりと崩れ落ちる。

「お姉ちゃん……何やっているのよ」「

深く溜め息を吐き、続きを読む。

P.S

フェイトさんへの手紙でネギさんの現住所が分かったから、書いておくわね。

ラブレターでも何でも書いて、セクストウムさんよりも先に彼を物にしなさいね。

「前言撤回。お姉ちゃん、グツジョブ」

急に機嫌の良くなったルーナは、早速その住所へと手紙を書くのであった。

番外編 F氏の日常（後書き）

という訳で、フェイトの日常風景でした。
平和な世での彼の日常はやはり、栞の姉の下にいるんだと思います。

最終課題はこれで

ネギが麻帆良に来て早一週間。

どうにか授業をこなし、授業後にしずなから意見をもらいつつ、昼休みには中等部の大ベテラン、新田に教師としての心構えの教えを乞う。

退院した高畑や木乃香達魔法生徒から2 - Aの詳しい情報を得て、コミュニケーションの糧とする。

帰宅後は暇を見て人気の無い場所に結界を張り、個人的な修行に打ち込む。

そんな日々を過ごして一週間が過ぎた、ある日の昼休み。

いつも通り、新田に教えを乞っている最中、二人の生徒がネギの下へ駆け込んでくる。

「ネギセンセツ、助けてください!」

「高等部から苛められて、裕奈とアキラが!」

「ええっ!?!」

駆け込んできたまき絵と亜子の叫びに、ネギは驚いて席を立つ。

ただ、席を立つたのはネギだけではない。

「それは本当かね?」

ネギと話し込んでいた新田が、眼鏡の位置を直しながら立ち上がる。その様子を見た他の教員達は、もう大丈夫だなと仕事に戻る。

普段は厳しい新田だが、生徒を大切に想う気持ちは人一倍だという事を、教員全員が理解している。

本人が不器用なのか、生徒側には上手く伝わっていないが。

「に、新田先生!？」

「は、はい。ホンマです……」

二人から肯定の言葉を受け取った新田の雰囲気が変わる。

「場所はどこだね」

「ぶ、部室棟のある所です」

「分かった、すぐに行こう」

場所を教わった新田は、早足に職員室を出て行く。

まさか新田が絡むとは思っていなかった二人は、困惑した表情になってネギに視線を送る。

「大丈夫ですよ、麻帆良の静かなる熱血教師と陰で呼ばれている新田先生が、こっちの味方に付いたんですから。さっ、僕達も行きましょう」

教員の中ではそう呼ばれているのかと思いつながら、走り出すネギの後を亜子とまき絵も追って行った。

ちなみに陰の呼び方を教えたのは、同じく中等部の魔法先生、瀬流彦である。

「向こうです。って、うわぁ……」

三人が現場に到着すると、新田が高等部の生徒を全員正座させ、説教をしていた。

まさかの人物の登場に、助けられた裕奈とアキラも座り込んだまま、呆気に取られている。

来る途中で以前にアドレスを交換したシャークティーにも連絡を入れておいたが、そのシャークティーも現場を目の当たりにして困っ

ている。

どうするべきかと、連絡をくれたネギに戸惑いの視線を送る姿は貴重なので、とりあえずネギは写メにしておいた。

後で正気を取り戻した彼女に、消してくれと懇願されるとも知らずに。

「ね、ねえ、ネギ先生。どうするべきかな？」

「とりあえず、お二人を助けてきますね」

この場で唯一冷静さを保っているネギは、新田の下に歩み寄って裕奈とアキラの保護と、シャークティ어의存在を告げる。

一言二言言葉を交わすと、ネギは二人の下へ、新田はシャークティ어의下へと向かう。

そのまま相談を始める二人を他所に、アキラと裕奈の状態を確認する。

「もう大丈夫ですよ。怪我はありませんか？」

「えっ？ あ、うん。大丈夫だよ」

「私も大丈夫　っ！」

裕奈が立ち上がるうとした瞬間、足に痛みが走って蹲る。

「裕奈さん!？」

足首を押さえて表情をしかめたのを見て、靴を脱がせて足の様子を見る。

変に捻ったのか、患部は腫れていないが赤みと熱を持っている。

「大変だ。すぐに保健室へ行かないと」

「大丈夫だよ、これくらい。ちよっと捻っただけだから、放ってお

けば」

「駄目です！ 裕奈さんはバスケ部なんですから、ちゃんと治療しないと。いいですね！」

真剣な表情をして、強い口調で注意する姿に運動部四人組は一瞬戸惑った。

これまでの、立場が違うだけのクラスの男子という意識が、ネギは教員だという意識に変化する。

「あつ、うん。じゃなくて、はい」

意識の変化のせいか、今まで通りではなく自然と目上相手の喋り方になってしまう。

「ともかく、保健室へ。亜子さん、お願いします」

「へっ？ あつ、は、はい！」

思わず見惚れていた亜子は、呼びかけられて正気に戻り、裕奈に肩を貸して立ち上がらせる。

あとは保健室に連れて行くだけかと思いきや。

「せ、センチ。ここはウチだけじゃアカン……」

移動中に階段に差し掛かったが、ここは以前にのどかが落下した階段と同じような造り。

足場が狭く角度も急なため、手ぶらでも上るときにでも注意が必要な難所。

当然、怪我人に肩を貸して上るのも困難。

「遠回りしていたら、次の授業に間に合いませんよね？」

「だと思いません」

膝を擦りむいていた為に保健室に同行するアキラが、ネギの問い掛けに答える。

「といっても、このまま突っ立っていても仕方ありませんよね」

「仕方ないか、次の授業に遅刻するのを覚悟で遠回りして」

「ここは僕が裕奈さんを抱えて行きましょう。上に行ったら、引き続き亜子さんにお任せします」

「ああ、なるほど。そんな手段が……って、ええええっ!？」

思いがけない提案に四人揃って驚く。

何をどうしたら、そんな考えに辿り着くのだろうか。

「ネ、ネギ君？ 何でそんな結論に達したのかな？」

「父に女性に対する扱いを教わった際、そんな事を聞きました。母も照れて肯定はしていませんし」

「……その現場、見てみたいような、そうでないような」

唯一の魔法関係者である裕奈は、昔何かの本で見たナギとアリカの姿でその現場を想像する。

実際はナギの間違った知識による教えを、過去に同じ経験をナギにされたアリカが思い出し、諫めようとしたのだが。

「で、どうします？」

「え、えっと、その……」

当の本人である裕奈も妄想から現実に戻り、思考を巡らせる。

とはいえ、正確な思考ができるはずもなく、真っ白な頭でネギの体をまじまじと眺める。

背は高いけど細身だなとか、そんな体で自分を運べるのかとか、余計な事を考えて思考回路が捻じ曲がる。

「……よろしくお願いします」

結局、色々な誘惑に負けて了承してしまった。

そういう訳で抱えようとしたタイミングで、亜子がある事に気付く。

「あの、ネギセンセ。背負うんじゃない駄目なんですか？」

考えてみれば、何も抱かかえる必要は無い。

背負うという手段もあるのだから。

それに対し、ネギは何故か言葉に詰まる。

「えっと、その。背負うのは駄目です」

「どうしてですか？ 抱えるよりは背負う方が」

「いや、その、女性を背負うと僕の背中に、その……」

訳ありげな言い回しに、四人はどういう意味かを考える。

やがて、裕奈、亜子、アキラは結論に辿り着いた。

「な、なるほど」

「それは確かにアカンわ」

「えっ？ 何？ どういう事？」

一人訳の分からないまき絵に、頬を赤くしたアキラが耳打ちする。それを聞いて理解したまき絵の顔も、あっという間に赤くなった。

「さすが英国紳士、そういう所に気付くなんて」

注目点が少々違う気がするが、この際誰も気にしなかった。

.....
.....
.....

「それで、ネギ先生に抱えられて天国への階段を上ったんだな」

放課後の魔法授業のため、魔法生徒と関係者数名が集まった森の中。銃の安全装置を外した龍宮が、殺気を丸出しにして裕奈に銃口を向けている。

「いやいやいや、銃口を向けられる意味が分からないんだけど？」

「そうか。なら、刹那」

「ああ」

「いやいやいやいや、刀を向ければいいという訳でもなくてさあ」

夕風の切っ先を突きつけられ、焦る裕奈。

その背後では、ザジが音も無くナカマを呼ぼうとしている。

食べていいかという質問に頷いているのを、ネギが必死に止めようとして、そのネギに明日菜が喚き、美空と刀子は顔を青くして立ち尽くしていた。

「なんやの、このカオス」

最後に来た木乃香の、この一言が現状を表していた。

「なるほど、なるほど。そないな事があったんか。まあ、怪我じゃ仕方ないんじゃないの？」

「そう言いながら、杖がこっちに向いているんだけど!？」

口では仕方ないといいながらも、杖の先は裕奈を一直線上に捉えている。

逃れようとしても、まるで追尾でもしているかのように、正確に杖の先端が向いてくる。

「お願いします、許してください！ 土下座でもなんでもするし、ネギ先生の体つきの情報も渡すから！」

土下座では反応が無かったが、体つきの情報と聞いて暴走していた四人の動きが止まる。

「そりゃあ、ネギ君が天然タラシなのは今に始まった事やないからなあ」

「うむ。仕方ないと言えば仕方ないか」

「今回はこれくらいで許してあげましょう」

「……食べちゃダメ」

銃と刀と杖が下ろされ、ナカマとやらは消え失せる。

しかし明日菜の暴走だけは収まらず、ネギの両頬を掴んで引っ張って伸ばしている。

（た、助かった）

命を拾った裕奈はほっと胸を撫で下ろす。

しかしこの後、ネギの体つきについて二十分ほど追求されたそうなの

「うう……ほっぺが伸びるかと思いました」

「自業自得です。無意識だからまだいいものを、これが意識的で今が江戸時代なら、ネギ先生は誑しこみの盗賊になれますよ」

魔法授業を終え、報告のために先に帰った刀子を覗くメンバーでカフェにいる。

頬を擦るネギに刹那が皮肉を告げるが、例え方が少々分かりづらく、数人が首を傾げていた。

ちなみに誑しこみとは、狙った店や家にいる女性を口説き落とし、その女性を利用して店や家に入りこんで盗みを働くことである。

「分かりにくい刹那の例えは放っておくとして」

「そんなっ!？」

龍宮の言い分に軽くショックを受けるが、事実なので誰もフォローできない。

「やはり何かしなければな、君のその天然誑しは」

「そんな事言われても……」

「あんたは黙ってる! まったく、ほんと父親に似たんだから」

文句を言いながら腕を組む明日菜の脳裏には、ナギが独身時代に写された、大勢の女性に囲まれている姿が浮かぶ。

以前にガトウが部屋の整理をしていた時に出てきて、どっという写真かを聞かされた記憶がある。

「そやけどナギさんはもう奥さん一筋なんやから、ネギ君も結婚すればその辺はなんとかなるんとちゃう?」

「甘いわ! 確かに愛はアリカ伯母様にだけ向いているけど、天然誑しはそう簡単には治らないって、愚痴っているのを聞いたことがあるわ!」

身内の明日菜が言うだけあって、妙に説得力がある。

「そやけど浮気しとるわけやないやろ？」

「コウキ義兄さんの情報網にも、そんな情報は皆無だ」

「ならば問題ないでしょう」

「……同感」

しかしそんな言葉も、嫁（予定）連合（仮）には通じなかった。

明日菜は半ば呆れ、裕奈と美空は苦笑いを見せる。

そんなネギ達の下へ、慌てた様子で刀子がやって来る。

「ネギ先生！」

「あれ？ 刀子先生。どうかなさったんですか？」

「先ほど魔法授業の報告書を提出した際に、これをお預かりしてきたのですが……」

差し出された封筒には、ネギ君への最終課題と書かれていた。

「さっ、最終課題!？」

思わず声に出してしまったので、明日菜達の耳にも入ってしまった。どういふ事か、内容は何なのかと身を乗り出してくる。

「い、いったいどんな課題が……」

「安心しい、ネギ君。無茶苦茶な課題やったら、ウチが殴りこんで訂正させるさかい」

そう言つて、どこからともなく金槌を取り出す木乃香。

「お嬢様、その時は私もご協力します」

「私もだ。最近入手したマシンガンの試し撃ちも兼ねてな」

「……ナカマとトモダチ、たくさん呼ぶ」

物騒な発言に少しばかり学園長を不憫に思う。

もしもこれで内容が、魔法二百種取得とか、学園の地下に封印されているドラゴンを倒せとかだったら、確実に学園長は明日の日を拝めないだろう。

「明日菜、叔母として甥っ子の嫁（予定）の暴走をなんとかしてよ」「そうそう。大事にならないうちにさ」

「無茶言わないでよ！ 木乃香はともかく、後の三人をどうやって止めるっていうのよ！」

肘で小突きながら話しかけてくる美空と裕奈に、顔を真っ青にして返す。

いかに戦闘力の高い明日菜とはいえ、刹那や龍宮、ザジの領域にはまだ届かない。

それなのにこの三人を同時に相手になど、できるはずがない。

「と、ともかく中を見てみないことには……」

気を取り直して封筒を開けるネギ。

どんな内容が書かれているのかと、注目が集まる中で開かれた手紙の内容は。

ネギ君へ

今度の期末試験で2 - Aが最下位じゃなかったら、正式な先生にしてあげる

学園長より

「な、なんだ、こんなことでいいんで……」

「無理やあああつ！」

「刹那さんっ!?!」

いきなり関西弁に戻って叫ぶ刹那に、ネギの嫁（予定）の四人以外は驚きを隠せない。

「お爺ちゃんの馬鹿あああつ！　なんでこないな課題出すんやあつ!?!」

「やはり乗り込むか！」

「……皆の者、討ち入りでござる」

頭を抱えて喚く木乃香に、拳銃を構える龍宮、ナカマを召喚しつつ何故か時代劇口調のザジ。

どうしてこんな事態になったのか分からないネギと刀子は、明日菜達に目をやる。

しかし最初に目に入った明日菜は、木乃香と刹那以上に頭を抱えて顔を真っ青にしていた。

「ヤバイ……もしも私のせいでネギの修行が失敗したら……。アリカ様の鉄槌が、鉄拳が、凶^{きょういく}逝^{いく}苦的指導が……」

まるで狂ったかのようにブツブツと呟き出した姿に、当てにならないと見限って美空と裕奈に視線を向ける。

残っていた二人は、苦笑いを浮かべていた。

「あの、木乃香さん達のあの反応はいつたい？」

「ああ、そっか、ネギ先生は知らないんだ」

「うちのクラスって、試験では万年最下位なんだよ」

「へえ、そうなんですか……って、ええええっつ!?!」

初めて知った事実にはネギは驚く事しかできない。
高等部担当の刀子も、それならばあの反応も頷けると、決起集会らしき話し合いをするネギの嫁（予定）連合に目を向ける。

「万年最下位つて、最下位以外にはなつた事はないんですか？」

「……はい、恥ずかしながら一度も」

「そんなあああっ！」

気まずそうに告げた美空の一言で、突きつけられた現実にネギは苦悩する。

学園長の身の安全の為、どうにか木乃香達を説得している刀子も、これは厳しいなと心の片隅で思った。

その刀子が高等部に戻って行った後、ネギの最終課題合格に向けての作戦会議が、この場で開始された。

「これを見る限り、安心していられるのは七人だけか……」

成績表を基に作った表を広げ呟く。

学年で一桁の順位に入っている超、葉加瀬、あやかと、三十位以内ののどか、百位前後の朝倉、木乃香、那波は問題無い。

だが問題は、他の生徒達。

2・Aの生徒のほとんどは、三百位から五百位半ば辺りに集中している。

そして何より問題なのは、クラスどころか学年でもほぼ最下位に近い明日菜とまき絵を始めとした五人。

調べてみれば、この五人は授業中の小テストも毎回居残りの偉業を達成している。

それゆえにこの五人には、バカレンジャーという不名誉極まりない称号が与えられている。

「……明日菜さん」

「分かってるわよ、自分の頭が悪いことくらい！ 今度の試験はなんとかするから、武器引っ込めて！」

後頭部に銃口、首筋に夕凧を突きつけられて涙目になって叫ぶバカレッドこと明日菜。

どうにか武器は引っ込めてもらったが、次の試験までそれほど時間は無い。

これからすぐに勉強会だと、会計を済ませた木乃香に引っ張られていってしまった。

それを機に残る生徒一同も勉強のため、寮へと帰っていく。

特にクラスの下から六番目、バカレンジャー候補生の刹那は、真っ先に会計を済ませると必死な形相で帰って行った。

「……さて、僕はどうするべきかな？ やっぱりここは他の先生方と相談して……」

「くくくつ。お困りのようだな、ボーヤ」

考え込んでいる最中に掛けられた声に振り向く。

そこにいる二人の生徒のうち一人は、ネギの生徒であると同時にある因縁を持っている。

「エヴァンジェリンさん……。父の事でしたら、ゴールデンウィーク頃には」

「そんなのはどうでもいい。お前がこの学園にいれば、いずれあの親馬鹿の方から来るとは予想できるしな」

不適な笑みを浮かべて向かいの席に座り、もう一人の生徒、絡操茶々丸はエヴァの右斜め後方に控える。

視線を茶々丸にやっていると、エヴァから従者だと伝えられる。茶々丸本人も頷いたので、念のために会話における認識阻害の魔法を使い、話を始める。

「用件は何ですか？ 忙しさにかまかけて、今の今まで父の件で謝罪なりなんなりに行かなかつたから、拗ねているんですか？」

「誰が拗ねるか！」

「じゃあ、あなたの呪いを解くために父が同伴していなかったのを、拗ねているんですか？」

「だから、誰が拗ねるか！」

「じゃあ何で拗ねているんですか？」

「拗ねているのは決定事項か貴様！ せっかく小うるさそうなのが消えたから接触したというのに、話が進まないではないか！」

「落ち着いてください、マスター」

バンバンと机を叩いて騒ぐエヴァを茶々丸が止める。

息を切らしながら落ち着いたエヴァは、トマトジュースを注文して話を始める。

「まったく、そういう所は奴に似てるな」

「息子ですから」

「まあいいさ。ところで、あの親馬鹿から何か伝言か手紙を預かってきていないか」

「いえ別に。あつたら既に届けていますよ」

微かに照れながら掛けた問いかけに否定で即答され、エヴァの表情が微妙に引き攣る。

「そ、それもそうだな。今日まで期待していた私が馬鹿だった」

「エヴァンジエリンさん、成績それほど良くありませんね」

「余計なお世話だ！　というか十五年もいたら聞き飽きてやる気が
せんのだ！　もう中学生生活五周目だぞ、三周目辺りから飽きたわ！」
「マスター、冷静に」

再度茶々丸に諫められ、息を切らして運ばれて来たトマトジュース
を口にする。

「貴様といると、何か調子が狂うな」

「そうですか？」

「そうなんだ。全く、スプリングフィールドとはそういう家系なの
か？」

「さあ？」

首を傾げたネギに、エヴァは深い溜め息を吐く。

その一方で、昔のナギとのやり取りを思い出しているかのような気
持ちになっていた。

「ともかくだ。話は聞いた、ボーヤにここを離れられるとあの親馬
鹿が来なくなるかもしれないから、今度の試験には協力しよう」

「協力とは？」

「全力を出してやろうという意味だ。十五年もここにいる私だ、本
気を出せば上位にはいける」

「なら普段からちゃんとやってください」

「はっ、面倒だ」

教師らしいネギの発言を一蹴し、口に含んだ氷を噛み砕く。
なんとも彼女らしい行動と発言に、思わず苦笑いが零れる。
そんな中、ふとある点に気付く。

「ところでエヴァンジェリンさん、どうして父の事を親馬鹿って呼

んでいるんですか？ 実際に親馬鹿ですけど」

「ふん、誰が教えるか。あの日の出来事は、私にとって屈辱的な日々の始まりだったんだからな」

「じゃあ今度の試験で個人成績が二十位以内に入れなかったら、教えてください」

唐突に告げられた一言に、思わずトマトジュースを嘔いてしまう。すぐに茶々丸がハンカチでふき取る最中、エヴァは立ち上がって反論する。

「ちょっと待てい！ どうしてそういう事になる！？」

「いいじゃないですか。本気を出せば上位に入れるんでしょう？」

「だったら二十位以内に入れた場合、私と一晩付き合ってもらおうぞ！」

エヴァの発言に今度はネギが嘔き出し、エヴァの制服を拭き終えた茶々丸の手からハンカチが落ちる。

周囲は会話の認識阻害のお陰で気付いていないが、もしも聞かれていたらどうなっていたことか。

「……マスター？」

「くつくくくつ。楽しみにしている。言っておくが、手加減はしないからな！」

悪魔的な笑みを浮かべ、その場を去って行くエヴァ。

茶々丸も一礼し、すぐに後を追って去って行った。

呆然としたネギが、エヴァが会計をしていない事に気付いて立て替えるまで、後数分。

おまけ

帰宅の道中、ブツブツと文句を言っているエヴァに茶々丸が問い掛ける。

「マスター」

「ん？ なんだ、茶々丸」

「サウザントマスターからネギ先生にのりかえるのですか？」

突拍子もない発言にエヴァは勢いよく転んだ。

「なんでそうなる！」

「一晩付き合えと言っていたので、ネギ先生と肉体関係を望んでいるのかと」

「……お前のそういう、遠慮の無いストレートな発言はたまにムカツクな」

「申し訳ありません」

丁寧に頭を下げる茶々丸。

だがエヴァは怒りつつも、頬を染めて言葉を返す。

「だがまあ、私とていつまでも既婚者に入れあげている訳でもない。ディナーを奢らせる程度で済ませようと思ったが、そういうのも悪くないな」

スカートの土ぼこりを払って立ち上がるエヴァの後ろ姿に、茶々丸はしばし思考を巡らす。そして行き着いた答えは。

「結果的に私がのりかえる手助けをしたのですね」

「……茶々丸、帰ったら全力で巻いてやる」
「えっ!?!」

数十分後、エヴァンジェリン宅から茶々丸の悲鳴が木霊した。

最終課題はこれで（後書き）

今回はここまでです。

次回は図書館編です。

司書参上！

最終課題を手渡された翌日、教室に行くとは何か全員真剣に勉強していた。

「あらあら、珍しい事もあるのね」

いつもならテスト前でもいつものように騒いでいる2 - A生徒一同が、勉強に励んでいる。
あまりに珍しい光景に、思わずしずなは眼鏡を拭いて掛けなおす。しかし目の前の光景は現実であって、決して見間違いで夢でもない。

「ああ、ネギ君。助けてえ！」

ようやくネギの到着に気付いたまき絵が助けを求めると、それに乗って他の生徒も助けを求める眼差しを向ける。

「どうしたんですか？」

「教室に着くなり、いいんちよが勉強しろって煩くて、逃げようとしたらどこからともなくゴム弾が飛んで来るし」

ゴム弾という言葉に龍宮へ目を向ける。

当の本人はゴム弾を撃ったと思われる銃をチラつかせながら、ほくそ笑んでいる。

ネギの表情を微かに引き攣ると同時に、あやかが立ち上がる。

「当然です。私達の成績でネギ先生の就職が決まるんですよ。協力しないですみますか」

「でもお」

「ではまき絵さん、あなたは私達の成績のせいで、ネギ先生が就職浪人になってもいいというのですか!」

「いや、それは確かに嫌だけど……」

「なら頑張つて勉強なさい!」

少々大げさ過ぎるかも知れないながらも、妙に説得力のある発言にまき絵はすくすくこと引き下がる。

「あの、いいんちよさん。熱心なのは構いませんけど、もうホームルームですので」

「ああ、すみません。私としたことが」

慌てて席に着くあやか。

今日の日直のハルナの号令で挨拶を済ます。

「とりあえず、ええっと……朝倉さん、何がどうなって僕の就職問題になっているんですか?」

少々危険かもしれないが、一番情報を的確に伝えてくれると思わしき朝倉に事の次第を尋ねる。

「昨日の夜、皆に木乃香からメールが来て、私達が次の期末で最下位脱出しなかったら、クビになってイギリスに帰る事になるってあったんだよ」

「それで私の呼びかけの下、こうして勉強に励んでいるという次第です」

それで本当に勉強している辺り、このクラスの団結力と律儀さをネギは垣間見た。

しかし一番心配していた五人はそうもいかなかった。

数学の問題集を前に泣きながら手の止まっているまき絵。

日本史の参考書を開いて、魂が口から出掛かっている古菲。

英語の教科書を開いたまま、座った状態で燃え尽きている楓。

勉強をしているように見えるが、教科書の向こう側では関係無い本を読んでいる夕映。

教科書や参考書を乱雑に広げ、口や耳、果ては頭や目からも煙を出してオーバーヒートしている明日菜。

予想通りと言えばそれまでだが、見ていてなんだか不安になってくる。

「と、ともかく皆さん。無理してテスト当日に体調を崩さないようにしてください」

「大丈夫だつて、私達若いから、徹夜の一日や二日！」

「テストは四日後ですよ!？」

一日や二日徹夜しても、まだ二日ほど間がある。

第一ネギとしては、そんな一夜漬けのような勉強はしてもらいたくない。

しばらく間を置いて考えを纏めたネギは、連絡事項を伝える前にその事をしっかり伝える。

「皆さん！今回は急な事なので、このような勉強も仕方ないでしょう。ですけど、その場凌ぎのような勉強は教師としては反対です。勉強をやりたくないのは分かりますが、僕達も今しか教えられない事を教えています。日本の言葉に一期一会という言葉がありますが、どうか普段の勉強にもそれを感じて、今しか教われない大事な知識として、覚えるように心がけてくださいね」

同い年の口からスラスラと述べられる、教師らしい言葉に生徒達は

心の中で歓声を上げる。
極一部を除いて。

「ねえネギ」

「はい、なんですか明日菜さん」

「小難しくてよく分かんないんだけど」

この一言にネギはがっくりと項垂れた。

隣の席の木乃香も苦笑いを浮かべ、あやかは立ち上がって抗議する。

「まったく、このオジコンのお猿さんは！ せっかくネギ先生が素晴らしい事を言ってくださっても、馬の耳に念仏ですわね。おっと、馬ではなく猿でしたわね」

「なんですつてえ！」

これをきっかけに、このクラスでは定番の明日菜VSあやかに発展する。

周りはどつちが勝つかを賭け始め、しずなはいつものように笑ってネギを眺めるだけ。

そんな、自分の力でどうにかしろという無言のメッセージに、大きく息を吐いて教壇を出席簿で叩く。

教室に響き渡った音に騒動は収まり、騒いでいた生徒達は一斉にネギの方を向く。

「皆さん、おとなしくホームルームを続けるのと、屋上から裁縫系だけでバンジージャンプするのと、どつちがいいですか？」

にっこりと浮かべた黒い笑みと発言に、騒いでいた生徒達は一斉に席に付いて大人しくなった。

「では、ホームルームを続けますね」

目の前の状況に満足したネギは、連絡事項を伝えていく。しかし先ほど注意された生徒達は、まだ頭の整理ができておらず、連絡のほとんどを聞き逃していた。その日の夜、学生寮の大浴場にて。

「はつきり言つて、このままやとアカンわ!」

厳しい表情をする木乃香の前には、気まずそうな表情をするバカレンジャー達。

他にも数名のクラスメイトがその場に集まり、テスト対策を話し合っている。

「明日菜達の今のペースやと、赤点の三十点をギリギリ越えるか越えないかの当落線上や」

今日一日の勉強のペースから割り出すと、現在のバカレンジャーの学力が足を引っ張るのは目に見えている。とはいえ、時間もあまりない。

「そんな事言われても……」

「うえええん、このままじゃあたし達のせいでネギ君がクビになっちゃうううっ!」

「さすがにそれじゃ、進級しても居心地悪いアル」

「とはいえ、急に頭がよくなる方法など……」

「ありますよ」

頭を洗っていた夕映がシャンプーを流し、明日菜達の方を向く。

「図書館島はご存知ですか？」

「ああ、あの湖の所にあるデカイ図書館ね」

「そうです。その地下には、どんな人でも頭のよくなる魔法の書が存在するという噂があるのです」

魔法の書という言葉に、大浴場にいる魔法関係者が反応を見せる。

どこからそういう噂が流れたのかは不明だが、ここが魔法使いの学校である以上可能性は高い。

しかも謎の多い図書館島というのだから、信憑性もある。

（つてことは、それを使えばネギがクビにならず、アリカ様の鉄拳制裁も受けずに済む！？）

（それ使つて明日菜達の学力を上げれば、ネギ君がここに残ってくれるんや！）

（本当にその本があれば、ネギ先生が学園に残れる……）

明日菜と木乃香、刹那は乗り気になり、図書館島に行こうと言い出す。

最初は驚いていた他の面々も、いつもの2・Aのノリで話に乗る。

だがその一方で、あまり乗り気で無いメンバーもいた。

騒いでいる面々を見つつ、長谷川千雨は溜め息を吐いた。

（バカかあいつら。仮に本当にそんな物があつたとしても、あの先生が喜ぶか？）

彼女の見たところ、ネギという人物は元々の才能がありながらも、必死に努力してきた人間。

それは普段の授業風景や、授業の事で職員室を訪れた時や、他にネギが英語を受け持っているクラスの噂を聞けば分かる。

毎日の教え方も微妙な変化があり、彼なりに試行錯誤しているのが

感じ取れる。

(まっ、私には関係無いかな)

騒ぐ周囲に関わらないよう、一人こっそりと大浴場から去る。

そして部屋に戻ってパソコンを立ち上げると、そこには彼女のもう一つの顔があった。

「さあて、何か書き込みは来てるか？」

画面に表示されているのは、ちうのホームページと書かれたネットアイドルのホームページ。

眼鏡を取った千雨の顔は、そのアイドルのちうそのもの。

彼女は表向き普通の学生だが、その裏ではネットアイドルをやっている自称非リア充である。

そんな彼女のホームページは評判もよく、多少修正を加えた写真もあつて人気を博している。

また、一部では相談事や悩み事になかなか良い意見を返してくれるのも、人気を呼んでいる一つと言えよう。

椅子に座って足を組んだ千雨がホームページを確認すると、一件の書き込みがあった。

ハンドルネームは教育実習生N。

「教育実習生？ どちらの大学生か」

どこかの大学生かと思って書き込みを読むと、千雨はすぐにそれが自分の担任だと気付いて机に頭をぶつけた。

「な、なんであいつが……」

内容は今度の試験の事についての悩み。

皆が頑張っているのはいいが、それで体調を崩さないが、根を詰めすぎて当日に空回りしないか、寝不足で事故を起こさないか。

そついった自分の事よりも、生徒の事を気遣った事ばかり書かれて
いる。

返事を書くために全文を読んだ千雨の頭に、先ほどの大浴場での出来事が過ぎる。

自分には関係無いことだと言いつ聞かせたはずなのに、ネギの文章を読んでいると自分もこんなに心配されているのかという気持ちが湧いてくる。

同時に、クラスメイトが何かしでかす事を放っておいて、彼の不安を現実にしていいのかと。

「ああ、くそ！ おせつかいだな私も！」

机を叩いた千雨は連絡を取ろうとするが、生憎ネギの携帯の番号もメールアドレスも知らない。

そこで教職員寮に連絡を取り、管理人を通じて連絡を取った。

『はい、ネギですけど。どうかしましたか、長谷川さん』

「いや、ちょっと伝えておきたい事があります」

ぶつきらばつな口調ながらも、大浴場で耳にした事を伝える。

『なるほど。分かりました、そつちは僕がなんとかします』

「よろしく願います。それとくれぐれも、私の事は内密に。バシてあいつらに詰め寄られても面倒ですから」

『いいですよ。伝えてくれたお礼に、黙っておきます』

これで面倒ごとから開放されたはずだった。

後は通話を切れればいいというタイミングで、電話の向こうのネギに。

『それと、テスト前なのでネットアイドルは控えるようにしてくださいね』

と言われるまで。

それを聞いた千雨は口を開けたまま固まり、そうとは知らないネギは一人で喋り続ける。

『ホームページを見つけたのは偶然ですけど、一目で長谷川さんだつて分かりましたよ』

「あ、あの、何の話ですか？」

『やだなあ、とぼけないでくださいよ。ネットアイドルのちづさん』

完全にバれていると悟った千雨は、がっくりと頂垂れる。

これで自分の人生は終わったなどと呟きながら。

それでも携帯は切らず、最後にネギに問いかける。

「あの、どうして私だと？ 薄いとはいえ化粧して、画像修正もしているのに……」

『そりゃあ、僕は長谷川さんの担任ですから。生徒のことを見抜けないようじゃ、先生はやっていられませんから』

根拠も何も無い理由だが、千雨は少し嬉しくなった。

書き込みからも察していたが、本当に自分達の事を理解しようとしていて、気にしてくれているのだと。

「そ、そうですか。では私はこれで。それと、ネットアイドルの事も他言無用で！」

少々焦った口調でぶつきらぼうに言葉を伝え、一方的に電話を切る。そして背もたれに寄り掛かると、小さな声で呟く。

「まったく、下手な返事書けねえじゃねえか」

ネギの書き込みを前に、微かに頬を染める千雨であった。

一方のネギは一方的に電話を切った千雨の反応に微笑みながら、対応に動き出した。

まずはある人の下へ電話を掛ける。

『はい、もしもし』

「こんばんは、ネギです。どうもお久しぶりです。」

『これはこれは、どうかなさいましたか？』

「実はですね」

電話の相手に千雨の事以外を全て伝え、しばらく話し合う。

やがて話が纏まると、互いに電話を切ってネギは寮を出て図書館島へ向かう。

そして電話の相手は、部屋にいたもう一人の人物に声を掛ける。

「という訳です、久々に面白い事になりそうですね」

「ふっ、よからう。ならば彼の生徒が例の部屋に到達したら、この私が相手しよう」

「では私は、学園長に連絡を入れておきましょう」

かくして、図書館島潜入隊の知らぬところで対策部隊が動き始めていた。

そうとは知らずに、明日菜達図書館島潜入隊は入り口付近に集合していた。

潜入するのはバカレンジャーの明日菜、古菲、楓、夕映、まき絵、

そして木乃香と護衛の刹那。
地上でナビゲートするのは、図書館探検部からのどかとハルナ。
他には応援団としてチアの三人や、大浴場で話を聞き、野次馬をし
に来た美空に鳴滝姉妹、運動部四人組がいる。

「それでは出発するです」

『おおっ！』

一同で腕を高々と掲げると、潜入班は図書館島へ、地上班はその場
で待機する。

地図を広げた夕映を先頭に進む潜入班は、ナビゲートの助けもあつ
て順調に地下へ降りていく。

その潜入班が途中の休憩所で休んでいる最中、それを監視カメラで
見ている白いローブの人物がいる。

彼の名はアルビレオ・イマ。

かつてナギと共に世界を救った英雄の一人で、現在は訳あって図書
館島の地下深くの住まいに住んでいる。

「ふむふむ、どうやら今のところは問題無さそうですね」

キーを叩いて映像を切り替えて監視している所へ、電話が掛かって
くる。

表示されている電話主はネギ。

『はい、もしもし』

「こちらネギです。地上にいた生徒達は、全員制圧完了です」

そう伝えたネギのすぐ傍には、涙目になって正座させられている地
上班がいた。

彼女達の首には、「私達は寮の門限を破った愚か者です」と書かれ

たプラカードがある。

二度目の屈辱に、美空と鳴滝姉妹はぐうの音も出なかった。

「そっちは如何ですか？」

『問題ありません。今のところは、怪我人も無く順調に進んでいきます』

「そうですね。生徒をタカミチに預けたら、ガトウさんと二人で明日菜さん達を止めに行くので、それまで監視をよろしくお願いします」

『了解しました』

連絡を終え、電話を切ったタイミングでガトウとタカミチが暗闇の中を駆けて来る。

「おおい、ネギ君」

「悪い、少し遅くなった」

似たような背広姿で現れた二人に状況を説明し、タカミチは生徒を察へ連れて行き、ガトウはネギと共に図書館島に潜入する。

一方の潜入班はというと。

「むむっ……」

「どうかしたん、夕映」

「いえ、なんだか電波の具合が悪いのか、地上と連絡が」

トランシーバーの周波数をいくら弄っても、雑音ばかりで地上班と繋がらない。

「やはり古い型しか持ち出せなかったのが痛いですね。仕方ありません、ここからは私がナビゲートするです」

図書館探検部の備品庫から持ち出せたのは、型の古いトランシーバーのみ。
比較的新型の方は嚴重に鍵が掛けられているため、持ち出せなかった。

そのせいで自分達の計画が知られていて、地上班が捕まったとは知らない。

対するネギの方も、上手く通信が繋がらないので連絡を取れない。

「あつう。どうします、ガトウさん」

「仕方ない、アルに連絡を取って場所を聞いたら、直接捕まえに行こう」

そついう訳で再度アルに連絡を取ると。

『できれば捕まえられない方向でお願いします』

「はっ!?!」

『久々に面白そうな事になっているのに、これで終わらせるのはもつたいたい気がしましてね』

「おいちよつと待て! 何言ってやがる!」

『要するに私達にちよつと遊ばせてくださいという事です。大丈夫、万が一の時に備えて、優秀な監視員が傍にいますから』

アルが見詰める先の映像には、潜入班を遠くから双眼鏡で監視する黒いローブの人物がいる。

「そついう問題じゃねえだろ!」

ガトウが電話の向こうに叫んでいる最中に、一言も無く電話は切られる。

急いで掛けなおすが、電源を切ったのか繋がらない。ならばと、設備されている電話に掛けてみるが、電話線を抜いているのかこちらにも繋がらない。

「あの野郎！ 何考えてんだ！」

「アルビレオさん、変わった人ですからね。変な事しなければいいんですけど……」

不安なネギと焦るガトウは、急いでアルの下へと急行する。

しかしどんなに急いでも、既に手遅れとなっている。

なぜなら、いくつもの罠と苦難を乗り越え、潜入隊が目的地に迫っていたからである。

「ここです！ この上が我々の目的地なのです！」

狭い通路を這いつくばって渡り、壁に埋め込まれている案内図に従い、天井の扉を開ける。

するとそこには、狭い通路とは打って変わって広い部屋があった。

石で形成された空間はどこか寂しげで寒気を感じる。

「図書館島の地下にこんな部屋があるとは……」

「それで、本はどこでござるか？」

「あ、あれ見て！」

まき絵の呼びかけに指差された先を見ると、祭壇に祀られた一冊の本があった。

その本は魔法書に詳しい者ならば知らぬ者はないという、メルキセデクの書。

これを上手く使えば、短期間で少々頭を良くするくらい朝飯前である。

「やったあ！ お宝ゲット！」

「これで試験も楽勝アル！」

真つ先に駆け出す明日菜と古菲。

だがそれを夕映が止めようとする。

「ちょっと待ってください！ それは最深部に位置するこの部屋にある本です。これまで以上の罠が」

「その通りだ！」

突然男の声が聞こえたと思ったら、祭壇への階段が崩れ、明日菜と古菲、まき絵が落下する。

どうにか着地した三人の下に残りのメンバーが集まると、再び男の声が聞こえた。

「はっはっはっはっはっ！ よくここまで来た、勇敢なる少女達よ！」

声の聞こえた祭壇の方を見ると、近くにある石像の影から黒いローブを羽織った人物が現れる。

フードで顔は分からないが、この人物が声の主ならば男に間違いない。

やがてその男か顔を上げると、フードの下には仮面があった。

「我は図書館島の司書が一人。名はデユナミス！ さあ、この書を得たければ我の問に答えよ！」

かくしてバカレンジャー + VS かつての使徒の戦いの幕が切
って落とされた。

司書参上！（後書き）

現れたのは図書館島の司書が一人、デユナミス。
果たして彼の出す問い掛けとは何なのか。

地下での戦い

試験で最下位を脱出するため、頭が良くなるという魔法の書を求めて図書館島に潜入。

既に地上班が捕まっているとも知らず、遂に目的地まで辿り着いた明日菜達。

しかしその前に、かつてナギ率いる紅き翼が壊滅させた組織の幹部が立ち塞がる。

フェイト同様に人間化した彼は現在、改心してこの図書館島の司書の一人として勤めている。

その名は、デユナミス。

「さあ、この書が欲しくば、我が問に答えてみせよ！」

祭壇の上から睨みつけるような視線を向け、叫ぶデユナミスは、少しノリノリな気分で言い放った。

突然現れた人物に、明日菜と刹那、楓と古菲が身構える。

そんな中、図書館探検部員である木乃香と夕映は、先輩に教えてもらったある事を思い出す。

「なあ夕映、あの人ひよつとして」

「ま、まさかあの人が、図書館島を守護するという、混沌の双壁の一人なのですか!？」

「……なんですか、それ」

聞いた事も無い呼び名に刹那が微妙な表情を浮かべる。

「図書館探検部に伝わる七伝説の一つです。先にも言いましたが、図書館島は重要書物が多いので、畏が仕掛けられています。その畏

を仕掛け、自らが盗掘者に対する最終兵器と化した二人の戦う司書。それが混沌の双壁です」

夕映の説明にデユナミスは仮面の下で笑みを浮かべる。そしてローブを脱ぎ捨て、高々と声を上げる。

「その通り。私こそ混沌の双壁が一人、黒のデユナミスだ！」

「という事は、近くにもう一人いるアルか!？」

「いや、相方の白のアルビレオは、モニタールームで我々の様子を観察している」

「見てるだけかい！」

鋭い明日菜の突っ込みも、今の状況では事態を好転へと導かない。そんな中で、夕映は皆に注意を呼びかける。

「気をつけてください。混沌の双壁は一筋縄ではいかないのです」

「分かっているアル。あいつ、なかなか強そうアル」

「あつ、いえ、そういう気をつけろという意味ではなくて」

ではどういう意味なのかと、皆が視線を向ける。

「図書館探検部の伝説によると、混沌の双壁は両者とも重度の変態としても有名なんです！」

デユナミスを指差して言い放った言葉に、明日菜達は昔のコントのように滑る。

一方の変態呼ばわりされたデユナミスはまるで気にしていない。

「何を言うか。私は変態ではない。変態という名の紳士だ」

「どこのギャグマンガなクマよ、あんたは！」

「ちなみに、あそこにいる黒のデュナミスは露出狂と聞いています」
付け加えられた性癖に、身を乗り出していた明日菜も二、三步後退する。

「そやけど、ローブの下にはちゃんと服着とるやん」

「分かりませんよ、お嬢様。ひよっとしたら、あの服は体の上に書いた絵かもしれません」

刹那の一言で、今度はまき絵と夕映が後退する。

「失礼な。これはちゃんとした服だ」

証拠とばかりに袖の辺りを摘まんで引つ張つてみせる。

とりあえず、刹那の予想が外れたので全員ほつと胸を撫で下ろす。しかし、そんな安堵感は一時に過ぎなかった。

「それに私は露出狂ではない。このように……ふうん！」

デュナミスが全身から魔力を発すると、その勢いで服が全部破けて首から下が裸になった。

「きゃあああつ!?!」

「私の発する力に服が耐え切れず、結果として全裸になるだけだ」

「一々やらずとも、口で説明すれば分かります！ いいから早く服を着てください！」

どこも隠すことなく仁王立ちするデュナミスに、全員目を逸らすか目を隠す。

左手で目を隠している夕映がデュナミスを指差し、服を着るように

言うがそうはいかない。

「あいにく、ここに予備の服は置いていない」

「だったらどっかに取りにいきなさいよ！」

「その隙に本を奪われかねるので、却下だ。この本が欲しくば、私の問に答えよ」

登場の時と同じ台詞を吐くが、明日菜達はそれどころではない。そんな時に怒りに燃える夕映が、脱ぎ捨てられたローブを目にし、指差して叫ぶ。

「だあぁっ！ この際、そこの脱ぎ捨てたローブでいいので前を隠してくださいです！」

「だが断る！ と言ったら？」

「この悪魔っ！」

ここまでくると、遊ばれている感がある。

実際にモニタームで監視しているアルも、面白そうに微笑んで映像を見ている。

その後の説得でどうにかローブを羽織って前を隠してもらい、ようやく露出の件は片付く。

そして、改めてメルキセデクの書を賭けた戦いを始める。

「それで、お主の問に答えろとは、どういう意味でござるか」

「そのままの意味だ。私の出す問題に正解すれば、この本を渡してやるということだ」

問題という一言にバカレンジャーが青ざめる。

ここまで苦勞して来たのに、どうして最後の関門が勉強なのかと。

「ちなみに答えてもらうのは、そこにいるお前以外の六人だ」

指差されたのは木乃香。

つまり解答者はバカレンジャーと刹那ということになる。

これには刹那が物言いをつける。

「ちょっと待つてください！　なんで私まで！」

「ここに潜入した時点で、君達がどのクラスの生徒かは調べさせてもらった。ここに来ることも予想し、成績もな」

成績と言われて刹那も黙ってしまふ。

「その娘はともかく、他は全員壊滅的だな。先ほど文句をつけた剣士も、赤点にはなっていないが危ないではないか」

「というより、何でそんな事調べてんのよ！」

「毎年いるんでな、お前達みたいな生徒が。だからその報告のためだ。ちなみに成績を調べるのは、我々の暇つぶしを兼ねた趣味だ」

「暇つぶしと趣味でそんなことするなあ！」

特に見られたくないバカレンジャーの面々が、次々に文句を言い出す。

赤点はどうにか回避しているのに、同列扱いされた刹那は膝から崩れ落ちて落ち込んでいる。

「とにかく、文句は言わせん。ここでは私がルールだ」

問答無用で文句を切り捨てられた明日菜達は、いつそ力ずくの強攻策に出ようかと、小声で相談を始める。

相手は一人だし、相手もここにはいない。

ならば、全員でかかれればどうにかなるのではと。

「ちなみに力づくで本を奪おうとしてみる。モニタールームにいる相方の手で、この部屋の床は全て抜ける」

心を読んだかのように指摘すると、戦うつもりだった面々は舌打ちする。

ここで床が抜けたら、自分達どころか本も無事では済まないかもしれない。

デュナミスの安全は、彼女達の脳裏には浮かばなかった。

「では早速始めるぞ。君達が解答する舞台は、これだ！」

祭壇の真ん中に立ったデュナミスが指を鳴らすと、床からテレビのクイズなどで使われる、モニター付きの解答台が現れる。

好きな台に着けと言われ、バカレンジャーのそれぞれの色に合った台に着く。

ちなみに刹那は、消去法で空いている白の台に着く。

「ではルールを説明する」

ルール

1・順番に問題を出し、正解不正解問わず、一人が答えたら、次は隣が解答者。

2・一人につき、最大九問出題。解答時間は三十秒

3・一問間違えるごとに罰ゲーム。五問間違えたら、その人は失格

4・誰か一人でも五問正解すれば、その場でクリア

5・科目はくじで決める

6・解答は台の上のボードにペンで書き、書き終わったら備え付けのボタンを押すこと

7・解答順は赤の台から横へ流れ、白の台の人が答えたら、赤の台

に戻る

「以上だ。ちなみのその娘もだが、周りがヒントを出すのは構わんが答えを教えるのは無しだ。他に質問は」

「はあい。罰ゲームって、どないな事するん？」

「危険な事でないのは保障する」

「内容を教えんかい！」

明日菜の叫びはスルーされ、出題科目をくじ引きで決める。

指名されたまき絵が恐る恐るくじを引いて開けると、中には英語と書かれている。

「という訳で、英語の問題を出す」

選ばれた科目に六人揃って頭を抱える。

ただでさえ総合成績が良くない中、この六人の一番苦手な科目は英語なのだ。

「うむむ。よりによって英語とは」

「拙い事になったアル」

「うえええん、皆ゴメン！」

「今更後悔しても始まりません。今はともかく、一問でも多く解答しないと」

台の上にあるボードとペンを取り、出題に備える。

準備が整ったのを確認し、遂に本を賭けた戦いが幕を上げた。最初の解答者は明日菜。

「では問題、DIFFICULTの日本語訳を平仮名五文字で答えよ」

「分かるか！」

一問目からいきなり分からないと叫ぶ明日菜に、モニタールームのアルもクスクスと笑う。

「アスナ、EASYの反対や」

「そんな事言われても、EASYって何よっ！」

「易しいですよ、明日菜さん！」

唯一バカレンジャーでない刹那と木乃香からのヒントに、明日菜の頭に答えが閃く。

急いで答えを書いてボタンを押すと、台のモニターに答えが表示される。

そこに表示されたのは、「むずい」。

自信満々の表情をする明日菜だが、ブーという音が響いて両脇からスモークが吹き出る。

「うひゃあああっ!?!」

「残念、外れだ」

「なんでよっ! 間違っでないでしょ!?!」

「私が出した問題を、よく思い出してみろ」

今回デユナミスが出した問題は……。

DIFFICULTの日本語訳を平仮名五文字で答えよ。
平仮名五文字。

五文字。

「二文字足りん」

「いいじゃないそれくらい!」

「黙れ、この場では私がルールだ。私が五文字と言ったら、五文字

で答える。そもそも、「むずい」、などという解答はどここの学校も教師も認めん」

妙に迫力のある口調で厳しく言われると、さすがの明日菜も言葉に詰まる。

仕方なく引き下がることにしたが、デュナミスは明日菜にある物を差し出した。

「……何コレ」

「見ての通り、眼鏡だ。ここからは、それをかけて挑め。安心しろ、度は入っていない伊達眼鏡だ」

これをつける意味が分からない明日菜だが、逆らってもどうせ無駄だと眼鏡をかける。

「では次の問題だ」

次の解答者のまき絵は、息を飲んで問題を待つ。

「CUTの日本語訳を、漢字と平仮名、両方使って二文字で答える」

「ええっと、カット、カット……」

「ほら、アレやハサミでちょきちょきって」

「あっ、なるほど！」

与えられたヒントに答えが閃き、急いで書いていく。

そして自信満々にボタンを押すが、間髪置かず不正解のブザーが鳴り、スモークが吹き出る。

あんなに分かり易いヒントを貰っておきながら間違うという光景に、誰もが目を疑う。

「げほっ、げほっ。なんで？ ちゃんと「きる」って書いたよ？」
「うむ。「きる」というのは間違っていない。だが、問題はその漢字だ」

デユナミスが指差すモニターに表示されていたのは、「切る」ではなく「着る」。

要するに読みは同じでも、字が違う、同音異語という訳だ。

「そういう訳で、罰ゲームだ。これを着る。更衣室は向こうだ」

差し出されたのは旧式のスクール水着。

しかもきつちりと、胸元に平仮名で名前が書かれている。

「なんでこんな物を!？」

「こんな物とは失礼な。スクール水着を馬鹿にするな、スクール水着に泣くぞ」

「……やっぱり変態です」

夕映の一言が、デユナミスを除く全員心境を表していた。

その後も続く問題にバカレンジャー+刹那が苦戦しているのを見物しているアルの下に、ようやくあの二人が到着した。

「アル、何を考えてるんだ!」

けたたましく開かれた扉と叫びに振り向くと、所々服が破れているガトウとネギがいた。

「おやおや、どうしたのですか、その格好は」

「どうしたのですかって。ここに来るまでの罫を仕掛けたの、全部アルビレオさんでしょう!」

ここに来るまでの道をネギが指差す。
そこには、これでもかと仕掛けられた罠の残骸が転がっていた。
破壊した痕跡がある物や、発動後の状態を保っている物。
中には服の切れ端が付着している物も。

「さすがですね。あの罠の山をきり抜けて来るとは」
「そういう問題じゃねえだろ！」

「落ち着いてください、ガトウさん。それよりも、僕の生徒は」
「ああ、ネギ君の生徒でしたら、ちょうどこんな感じですよ」

怒鳴られているにも関わらず、動じる事もなく笑みを見せるアルビ
レオ。

静かに睨んでくるガトウをスルーし、モニターの向こうの様子をネ
ギに見せる。
するとそこには。

伊達眼鏡にセーラー服、ガーターベルト装着の明日菜。

スクール水着にハイソックス、SMの仮面を付けたまき絵。

平仮名の名前入り体操着、ブルマ、三つ編みの楓。

丈の短い浴衣にスパッツの夕映。

ゴスロリ服に猫耳としっぽを付けた古菲。

メイド服に加え、両頬に猫髭を書かれている刹那。

六人に必死にヒントを出す木乃香。

たった今、不正解だった明日菜の髪を、恋姫の華琳的くるくるにし
ているデユナミスが映っていた。

その光景にガトウは表情を引き攣らせる。

そしてネギは。

「ふう……I'm Lovin' it！」

刹那を目にした瞬間、鼻血を噴いた。

「ど、どうした、ネギ君」

「いえ、ちよつと刹那さんの格好にやられました」

ボタボタと鼻血を垂らしながら答えた内容に、訳が分からないと首を傾げるガトウ。

しかし、アルは理解していた。

「なるほど。では彼女が、お隣の方の猫耳と尻尾を付けていたらどうです?」

「鼻血じゃ済みません。多分、吐血しています」

「ほおほお、ネギ君も中々いい趣味をしていますねえ」

うんうんと頷きつつ、アルが手帳にメモしていく。

「あと、できれば明日菜さんの付けているガーターベルトもプラスで」

「では、その旨をあなたの婚約者（仮）」の皆さんにお伝えしても?」

「それは結構です。教師として、男として理性が保てませんので」

鼻血の治療をしながら話す内容の濃さに、さすがのガトウも呆れて怒りなど忘れてしまう。

そうしている間にもまき絵が間違え、狐の耳と尻尾を付けられた。

「アル、お前な……これのどこが面白いんだ?」

「面白いじゃないですか。分かりませんか?」

「さっぱりだ」

もはやここに来た理由に關しても諦め、部屋の隅で煙草を吸い始める。

ネギも鼻血の治療でそれどころではない。

こうして、メルキセデクの書を賭けた戦いは止まる事なく続いていくこととなった。

地下での戦い（後書き）

今回はこれまでです。

アルとデュナミスを組み合わせると、ネタがあり過ぎて困ります。

図書館島の決着

メルキセデクの書を手に入れるため、色々な意味で必死の戦いを展開する明日菜達。

見守ることしかできないネギ達の前で、無い知恵を振り絞ってデユナミスの問題に挑む。

しかし、現実には常に非情である。

「神楽坂明日菜、五問失敗により失格だ」

五問目の間違いをした明日菜は、ルールにより解答権を失う。

台の上に手を置いてがっくりと落ち込む明日菜。

その姿を、今の格好のどこから取り出したのか、デユナミスが携帯で何枚も写真に撮っている。

「ちょっと、そんな物撮ってどうする気よ」

「五問失敗の罰は、その姿を私のブログで公開し、その事を イッターと ちゃんねるに書き込む事だ。安心しろ、目には黒い横線を入れておいてやる」

「何よ、その犯罪者の顔の隠し方は！？ ていうか、公開すんなあ！」

携帯を奪うために飛び掛ろうとする明日菜だが、デユナミスがロボの前を開けて臨戦態勢を取ると、急ブレーキをかけて目を隠す。同様に他のメンバーも咄嗟に目を隠す。

「きゃああっ！」

「どうした、掛かってこんのか」

「掛かれるか！」

それもそのはず。

羽織っているローブの下は全裸。

即ち、現在は前を隠していない状態なのだ。

「はあっ、はっはっはっはっ。この程度で怯むとは、初心な奴らめ」

「怯まない奴がいるかっ！」

「体育科の二ノ宮教師は、怯むどころか興奮して、夜の繁華街のあるホテルで私とハッスルしているが？」

明日菜の叫びに返してきた発言に、新体操部で二ノ宮に教えを請っているまき絵が固まる。

二ノ宮教師に付き合っている男がいる噂は聞いていたが、それが目の前にいる変態だと知って。

「に、二ノ宮先生！ 男の趣味が悪いですよぉー！」

この場にはいない、少し尊敬している教師に、まき絵は聞こえる事のない叫びを上げた。

ちょうどその頃、二ノ宮教師は風呂上りにくしゃみをした。

「そこのお前、佐々木まき絵！ 二ノ宮教師を侮辱するな！」

「侮辱していませんよ、男の趣味が悪いって言ったんですよ！」

「充分侮辱している！ それは彼女の私を見る目を疑っているという事ではないか、断じて許さん！」

突如始まった口論に、二ノ宮教師を知らない面々は発言に困る。

だが、男の趣味が悪いという点だけは激しく同意できた。

初対面にも関わらず、平気で全裸を披露する男を、とてもまともな男とは言えない。

そもそも、こんな男が異性と付き合えている方が不思議だ。そう考えている間にも論争は激化し、やがて。

「ならば佐々木まき絵よ、貴様が正しいと証明したくば、次の問題に答えてみよ！」

「おおっし！ これに正解して、私が正しいのを証明してやる！」

前の問題を間違え、新たに首輪を装着したまき絵が、真剣な表情で問題に向き合う。

しかし、どんなに気合いを入れても知識に変動は無い。

結果は火を見るよりも明らかだった。

「ぐすつ、ううっ」

見事に不正解となり、まき絵に泣きが入った。

対するデユナミスは、そんな事などお構いなしに高笑いしながらまき絵の姿を写真に撮る。

「ふっはっはっはっはっ！ 馬鹿め、この程度の問題も分からんとは」

「分からないんじゃないもん！ ちょっと忘れていただけだもん！」

「まきちゃん、台詞がなんか負け惜しみっばいで」

肩を叩いて木乃香にそう言われ、まき絵は涙しながら崩れた。

これで残るは四人。

うち、刹那が三問、楓は二問、古菲が二問、夕映が三問正解している。

加えて楓と古菲は既に四回間違えており、失格にリーチが掛かっている。

「では次、長瀬楓だな。問題、番号を英語で書け」
「番号、でござるか？」

頭を悩ませながら楓が書いた答えは。

B A N G O U。

勿論、文句なしの間違い。

「それはローマ字だ、馬鹿者。貴様、三問目でも同じ間違いをした
だろう、学習能力が無いのか！」

同じ失敗をした楓に説教をしつつも、右手にはしっかりと携帯を握り、
楓の姿を撮っている。

ちなみに、楓に加えられた最後の要素は、網タイツ。

普通なら恥ずかしがるところだが、本人は気にする事もなく、失格
になった事を残念そうに笑っている。

ちなみに正解は、NUMBER。

「さて、残りは三人か。まあ、少しはまともそうなのが二人いるが、
存分に楽しませてもらうぞ」

そう言っつて構える携帯に、刹那達は悪意を感じた。

「二人つて、私は最初から戦力外アルカ!？」

「……そうとられても、仕方のない成績ですからね」

「……否定しません」

仲間にも半ば戦力外通告をされ、古菲はいじけて体育座りをして床
にの字を書き始めた。

そんな古菲にも問題が出され、汚名返上と取り組むが不正解。

落ち込む姿を高笑いするデュナミスに撮られまくって、失格となっ

た。

「綾瀬さん、もう私達しかいませんよ」

「はいです。何がなんでも正解するのです」

執念に燃える二人は必死に答え、両者揃って二問続けて正解。

ところが、後一問でクリアという気の緩みか、今度は二人続けて三回目の不正解になってしまう。

「では次の問題だ。これに当たればクリア、外せばネットの晒し者にリーチだ」

「晒し者言うなです」

「やかましい、悔しければ正解してみせろ。では綾瀬夕映への問題、アイ、マイ、ミー、マインを記述せよ」

出題と同時に夕映がボードに答えを書き込みだす。

普段からは見られない、真面目に取り組む姿にモニタールームのネギも感心する。

だからといって、必ずしも正解する訳ではないが。

「I M Y M E M A I Nか、不正解だ」

最初の三問は合っていたが、最後の一つを間違え、スモークが吹き出る。

さらに罰ゲームとして額に肉と書かれ、屈辱です、と叫んだ。

ちなみに正解はI M Y M E M I N E。

「くっ、こうなったら唯一バカレンジャーじゃない刹那さんに頼るしか」

「バカレンジャーでないとと言っても、予備軍でござるがな」

「それは言わんといて、せっちゃん気にしとるから」

後ろの方で色々言われているとは気付かず、当の刹那はやや身を乗り出して問題に耳を傾ける。

「では桜咲刹那への問題だ。野球とサッカーを英語で書け」

「野球と……サッカー？」

どういふ競技かはすぐに思い浮かぶが、その英語がすぐに浮かばない。

うる覚えの記憶を引っ張り出して、どうにかペンを走らせる。後方から聞こえる声援を受け、残り五秒の所で解答し終える。

刹那の書いた解答は、BASEBALLとSOCCOR。

結果は……。

「……よろしい、正解だ。持って行け、この本を！」

正解の一言に、明日菜達は歓声を上げる。

これで見事五問正解を達成し、伝説の本を持って帰れる。成績アップでネギが麻帆良に残れる。

そんな思いが全員に立ち込めている、そんな時だった。

本を差し出したデュナミスの、この一言が炸裂したのは。

「貸し出し期間は、通常と同じ二週間だ。ちゃんと返却しろよ」

『……………へっ?』

告げられた内容に呆気にとられる明日菜達。

そんな様子を気にすることなく、デュナミスは話を続ける。

「まったく、ちゃんと閉館時間前に来ていれば、こんな事せずとも

貸し出してやったというのに」

「ちよつ、ちよつと待つです。閉館時間前とか貸し出しとか、どういう意味ですか？」

「そのままの意味だが？」

「その意味が、分からないって言っているのよ！」

拳を握って怒鳴る明日菜の発言に、事を理解したように頷いたデュナミスはこう言った。

「お前達、ここをどこだと思っているんだ」

「どこって、図書館島やろ？」

「そつだ。当然、この部屋もな」

それを聞いて、全員がようやく気づいた。

この部屋も図書館島の一部。

つまり、閉館するまでなら貸し出しを行える。

たった今、手渡されたこの本も。

「ちよつ、だったら何で私達はこんな事を！？」

「閉館後の図書館島に立ち入ったのと、寮の門限破り、許可無しで夜間外出に対する罰と、我々の暇つぶしだ」

「罰は仕方ないとして、何で暇つぶしにこんな事をするんですかぁ！」

興奮した猫のように怒る夕映だが、対するデュナミスは何も聞こえないように聞き流す。

そのせいで夕映が余計に興奮するが、それは明日菜達の手によって止められた。

「まあ何はともあれ、伝説の本が手に入ったんやし、これで試験も

」

楽勝だと続けようとした木乃香だが、メルキセデクの書を開けて驚いた。

なぜなら、メルキセデクの書なのは外見だけで、中身は至って普通の参考書と変わらないからだ。

フリーズした木乃香に他の面々も覗き込むと、やはり中身を見て固まった。

「こ、これどういうこと!？」

「どういうこととは、どういうことだ？」

「これよこれ、この本の中身よ！」

怒って本を突きつける明日菜だが、デュナミスは冷静な口調で。

「なんだ。貴様らまさか、本当に伝説を信じていたのか？ あんなのは所詮噂、ここにあるのは学園長一押し参考書だ」

あっけらかんと告げられた事実、明日菜達は今までの苦勞はと膝を着く。

そこへ、壁の一部が音を立てて開き、そこからネギとガトウ、アルが現れた。

「どうも、皆さん。遅くにこそ苦勞様です」

「ネ、ネギさん!？」

突然の出現に明日菜達生徒一同は固まり、特に明日菜は後見人のガトウもいるので顔色が悪い。

「全くお前らは。タカミチが神経性胃炎を患う理由が、ようやく分かったよ」

「とりあえず皆さん、罰として試験終了まで教室の掃除と、居残り補習という事で」

「デユナミス、ブログの更新は終わったので、後はツ　ッターと2　やんねるに書き込むだけです」

最初の発言に気まづくなり、続いている発言に絶望感を覚え、最後の発言に写真を撮られた明日菜とまき絵が反論する。

やめる、データを消せと叫ぶが願いは聞き入れられず。

高笑いする二人の手によって、顔が分からないように処理された写真がネットへとばら撒かれた。

この画像をたまたま見つけた千雨は、統一感もへったくれもねえっ！？　という意見を残した。

「まあ、色々やってくれた罰だと思って諦め」

『られるか！』

泣きの入った二人は、まるで人生の終わりのように崩れ落ちた。

同じく写真を撮られ、公開された楓はまるで気にしていないというのじ。

「楓は気にしないのか？」

「拙者はいざとなれば、人里離れた山奥に住めばいいでござるからな」

普通ならばおかしい発言だが、楓の事を知る刹那は納得した。

「さあ皆さん、明日も授業があるんですから、早く着替えて帰りましょう」

手を二、三回叩いたネギが、生徒達に呼びかける。

着替えという言葉に自分達の格好を改めて自覚するが、もはやどうする気力もなかった。

「はあ、という事は来た時と同じ道を辿るのか」

「えっ？ この部屋には一階直通のエレベーターがありますけど？」

『はあっ!?!』

エレベーターの存在を聞かされた明日菜達は、開いた口が塞がらなかった。

図書館探検部の二人でさえ、驚きを隠せないでいる。

「そ、そんな物があるとは聞いていないですよ!」

「そや。そんな物があったら、苦労してここまで来んわ!」

動揺を隠せない二人だが、部屋の物陰に隠れていたエレベーターを見せると、一気に疲労が湧き出てきた。

「こ、ここまでの苦労って……」

がつくりと膝を着いた二人の姿は、どこか痛々しかった。

しかし実のところ、このエレベーターは上り専用。

要するに地下から地上には行けても、地上から地下へは行けない仕組みになっている。

なので、存在を知っていても、来るために苦労するのは変わりない。その点を教わり、どこか落ち着いた二人を連れ、一同は数時間ぶりの地上へと辿り着いた。

「おお、久々の地上でござる」

「やっと帰って眠れるアル」

「いえ、もう寝る時間は無いですよ?」

『…………えっ？』

ネギの言った事が理解できないしていると、タバコに火をつけたガトウが東の方を指差す。

すると薄暗い空に微かに光が差し込み、朝の始まりが告げられているようだった。

「えっ、ちよっ、今何時!？」

「朝の五時、ちよっと前ですね」

「やばっ、バイトに遅れる!」

既に朝ということよりも、徹夜で授業を受けるという事よりも、明日菜にとってはバイトに遅れることが優先事項となった。

慌てて走り去る明日菜の背中を見送りつつ、残るメンバーは徹夜しての授業と、その後の掃除と補習に気が重くなる。

かくして、図書館島での騒動は終わった。

この後、彼女達、主にバカレンジャーのメンバーには、地獄の補習授業が試験日まで続いた。

だが、その甲斐あって無事に最下位を脱出、学年五位までクラスの成績を伸ばした。

しかし、その代償は大きかった。

「解きます、解きますから混沌の双壁の所に送るのは止めてほしいのです」

「あははあ、もうどんなに勉強しても全然苦しくなあい」

「やめるでござる、カエル風呂は勘弁でござる。英語だろうが数学だろうが、解答するでござるから」

「すいへいりーべ、ぼくのふね、ななまりしっぷす…………ちよっ、ちやんと答えるから睡眠学習はもうしたくないアル!」

「……………(白目+耳口鼻頭から白煙)」

こうして、無事にネギは正式に麻帆良学園の教師となった。

図書館島の決着（後書き）

ネギ君は無事に教師になれました、大きな代償を払って。ともあれ、次回からは数話ほど、春休み話となります。どうぞよろしく。

番外編 Sさんの日常

ネギ達のいる地球とは違う、火星に存在する世界。
それが魔法世界。

そこにある独立学術都市国家、アリアドネー魔法騎士団候補学校に通う、ある女生徒がいた。

「おおい、セクちゃん！」

廊下にて愛称で呼びかけられ、振り向くフェイトそっくりの少女。
彼女はセクストウム・アーウェルンクス。

かつてはフェイト同様に人形として作られていた彼女も、完成前に引きずり出され人間化。

今では普通に、一人の少女として生活している。

「どうかしたの、コレット」

「これこれ！ セクちゃん宛の手紙。誰からだと思う？」

手に持っている手紙をヒラヒラと揺らしながら見せる。

誰のからのものか予想できないセクストウムは、口元に手を添えて考える。

（兄の誰か……。ありえない、兄達の筆不精は私が一番よく知っている。使徒の誰か？ もっとありえないわね。後は……。っ！）

ある人物の顔が浮かんだ瞬間、クールビューティーで通っているセクストウムの表情から、クールさが消える。

「まさか、ネギ君！？」

まるで子供のような笑顔に、周囲にいた生徒達はどよめく。あの常に冷静なセクストウムが、こんな表情をするなど思っていなかったがために。

「正解！」

笑顔を浮かべて手紙の差出人の箇所を見せる。そこには、はつきりとネギの名前が書かれていた。

「届けてくれて、ありがとうございます！」

口ではお礼を言いながら、半ば奪うように手紙を受け取る。プレゼントを貰った子供のように急いで封を開け、嬉々として内容を読み始める。

普段の大人のような振る舞いや雰囲気はどこかに吹き飛ばされ、幼い子供のように見える。

「へえ。ネギ君、今は修行で日本の麻帆良学園に」

「あつ、そこ知ってる。あの伝説の紅き翼のメンバーだった人が何人かいる所だ」

紅き翼。

それはかつて、魔法世界の危機を何度も救ったナギ・スプリングフィールドの束ねるチームの名。

今はほとんど解散状態だが、メンバー間の交流は続いているらしい。

「ふんふん……って、配属先が女子中等部!？」

上機嫌に読んでいたセクストウムだが、配属先を知って大声を出す。

滅多に大声を出さない彼女だけに、周囲の驚きを隠せない。

「ちょっと、学園長さんは何考えているのよ！ 何でよりによってほとんど同年代の所に……」

焦りから手紙を握り締め、顔色が青くなる。

気分は悪くないのだが、ネギの置かれている状況に動揺を隠せないでいる。

「えっと、そんなに拙い事なの？」

「拙いですよ！ 女子校になんか赴任して、万が一私以外の女性と結ばれでもしたら！」

セクストウムの頭の中に、見知らぬ女性と仲良くするネギの姿が映る。

そして妄想は暴走していき、最終的にはその女性と結婚する姿まで思い浮かぶ。

そんな妄想を掻き消すように頭を振り、拳を握り締める。

「ごうしちゃんいられません。すぐにも麻帆良に行かなくては」

「ちよっ、待ってセクちゃん！ 向こうに言っている間、授業はどうするの？」

「代返しておいてください」

「代返でなんとかなるレベルじゃないから！」

そもそも、長期休みでもなく、卒業している訳でもないのに長期で外部に行ける筈がない。

どんなに成績が優秀であっても、まだ彼女は学生なのだから。

「そこら辺は、意地と気合いと根性でなんとかしてください」

「そこで精神論!？」

「人間、困ったら最後は精神論ですよ」

意味の分からない言い分に、コレットはクエスチョンマークをいくつも浮かべる。

周りも普段は見られないセクストウムの姿に、誰もが見とれてしまっている。

故に、この場にツッコミ役はコレット一人。

しかしコレットのツッコミレベルでは、恋する乙女のセクストウムは止まらない。

「ああ、ネギさん。今すぐに行きますから、待っていてください」

「行かないで、後生だから! あっ、委員長。いいところに、手伝って!」

どうにか押さえつけている所へ、クラス委員長のエミリィと、その付き人的存在のベアトリクスが現れる。

「何事ですか?」

「じつは、かくかくしかじかで」

「なるほど、要するにセクストウムさんが恋煩いで暴走していると」

こんな状況でも落ち着いているベアトリクスと、深い溜め息を吐くエミリィ。

仮にも自分と主席争いをしている相手の、こんな姿は見たくないとはかりに。

「ちょっとセクストウムさん? 恋にうつつを抜かしてなどいたら、立派な魔法騎士には」

「あっ、私は魔法騎士志望じゃないから」

「なれな えっ？」

あっさり魔法騎士志望ではないと言われ、呆気に取られる。確かに魔法騎士学校を卒業したからといって、必ずしも魔法騎士になる必要は無い。

中には魔法学者や、一般の魔法学校と同様にマギステル・マギを目指す者も少なくない。

「そ、そうでしたの。ですが、何の道に進むにしろ、色恋一つに暴走などしては」

「私の道？ 勿論、立派な魔法使いであり、ネギ君にとって唯一無二の妻であり、ネギ君のミニステル・マギである事！」

夜空でもないのに空の星を見詰め、小さくガッツポーズをするセクストウム。

そんな彼女の、どこまでも恋に生きる少女の姿に、もう周りは何も言えなかった。

唯一、エミリーの身に何か起きない限り冷静なベアトリクスを除いて。

「そういえばセクストウムさんはナギ様のご子息のネギさんと、幼馴染みだそうですね。やはり想いを寄せる理由はそこに？」

この状況でも冷静さを発揮し、頼んでもいないのに聞き込みを開始している。

「ええ、まあね。幼い頃は一緒に遊んで、夏は湖で泳いで、一緒にお風呂に入って、一緒に寝て……」

最初は純粹な感じだったが、言葉を重ねるに連れて煩惱が強くな

っていく。

特に一緒に風呂に入ったという辺りから、それが見られるようになり、段々と強くなっていく。

「抱き枕よろしく抱き合って寝たり、おままごとで夫婦役をした時は遊びとはいえキスしたり……」

「あ、あの、セクちゃん？」

「はあ、思い出してみte思ったけど……。私が見た目は子供、頭脳は大人だったらネギ君を私の体の虜に」

「それ以上は言わせませんわよ！」

いい加減に何かが切れたのか、エミリイが怒鳴ってセクストウムの妄想を止める。

せつかくの妄想を止められたセクストウムは、頬を膨らませてエミリイを睨む。

睨みは利いているものの、どこか可愛らしい仕草に周囲の生徒達は抱きつきたい衝動を必死で堪える。

「言わせてよ、私とネギ君の桃色な日々を」

「言わせませんわよ！ 第一、神聖な学び舎でそんなふしだらな事を」

「意中の男を欲望のままに求めるのは、女だけの特権でしょ？」

「そんな訳ないでしょう！」

「お嬢様、どうか冷静に」

息を切らして頭に血が昇ってきたエミリイを、さりげなくベアトリクスが宥める。

この辺りは、さすが主従といったところか。

一方のセクストウムは、一刀両断で否定され、少しむくれている。

「むう……。コレットはどう思う？」

「えっ、そこで私に振るの？ 恋愛経験無しの私に!？」

いきなり話を振られたコレットは、どうしようかとうろたえる。周囲からの視線に悩んだ末、出した結論は。

「せ、戦術的撤退！」

プレッシャーに耐えられなくなり、逃亡を選択。

しかしベアトリクスに回り込まれた。

コレットは回れ右をした。

しかしエミリイに回り込まれた。

コレットは窓からの逃亡を企てた。

しかしセクストウムに羽交い絞めにされた。

「なんで委員長達まで!？」

「一応、気になるので」

「その通りですわ」

「さあ、きりきり答えなさい。でないと……」

もはや手段は選ばないのか、セクストウムの背後に水で作られた立方体が出現する。

「ちよっ、待つ！ 力づく!？」

「私も嫌だけど、やむおえないわ」

「いやあ！ 誰か助けてえ！」

必死に助けを求めるコレットだが、誰も助けにこない。というより、行けない。

立方体を成型している水が床から溢れ出ている、段々と廊下を浸し

ているからである。

早く逃げないと、セクストウムの水加減次第では水流に飲み込まれかねない。

既に何人かの生徒は逃げ出し、残っていた生徒もそれに伴って逃げ出している。

これでコレットの運命は尽きたかと思われたが、こんな騒ぎを学校側が見逃しているはずが無い。

「はい、そこまでよ」

声と共に手を鳴らす音が響くと、魔法が解除されて水が消える。

次いでセクストウムが風魔法で拘束され、コレットが解放される。助かったコレットが振り向いた先にいた、命の恩人は。

「あつ、そ、総長！」

アリアドネー魔法騎士団の総長であり、ここの教師のセラスだった。

「誰か、念のためにコレットさんを医務室へ。後の三人は、私の部屋に来なさいね」

指示を飛ばし、主犯格と思われる三人に微笑む。

そんな微笑みも、セクストウム達には悪魔の微笑にしか見えなかった。

場所は変わって取調室もとい、セラスの部屋。

「なるほどね、話は分かったわ。エミリーさんとベアトリクスさんは、明日までに反省文の提出を」

「分かりましたわ」

「はい」

これまで罰らしい罰を受けてこなかったのか、エミリィは初めての罰に随分と落ち込んでいる。

「そして主犯のセクストウムさんには……」

どんな罰が下されるのかと、固唾を飲んで待つ。そして下されたのは。

「ここを出て行ってもらいます」

あっさりと言われた割に重い罰則に、一瞬室内が凍りついた。ここを出て行く、それはつまり。

「た、退学ということですか？」

あまりに厳しすぎる罰に、さしものセクストウムも声が震える。しかし、それはちょっと早とちりだった。

「いいえ、あなたには外部研修に行ってもらいます。卒業の日までね」

「えっ、外部研修？」

「そうよ。元々あなたは騎士団志望じゃないから、いつかは外部へ研修に出すつもりだったのよ」

それを聞いてほっとするが、ある事に気付いてエミリィが質問する。

「あの、でしたら罰にはならないのでは？」

「その点は考えてあるわ」

そうやって机の中から、数枚のプリントを取り出してセクストウムに差し出す。

受け取って表紙を見ると、そこには罰則課題事項と書かれていた。次のプリントには、課題における注意点、課題の提出期限等が書かれている。

「あなたには外部研修と平行して、罰則課題をやってもらいます。その課題に関するレポートを纏めて、こっちに送ってきなさいね。必要な事はそのプリントに書いてあるわ」

つまりは、研修とは別の課題を罰として出すという事だ。

「最初の問題は研修先に送っておくから、向こうで受け取ってね。それ以降は、送ってくれたレポートの添削と一緒に送るわ」

「分かりました。それで、行き先は？」
「実はある人から、あなたの外部研修先にここをお願いしたいって提案を受けてね。ここに決まったわ」

差し出された行き先の書類を見ると、そこにはこう書かれていた。
旧世界、日本の麻帆良学園と。
そして所属先は女子中等部教師。

「き、キターッ！」

あまりの嬉しさに発した叫びは、学校を飛び出し付近の民家にも響き渡った。

「遂に、遂に私の時代が来たのね。願書が間に合わなくて敵わなかった、ネギ君とのスクールライフが遂に……」

セクストウムの頭の中では、職員室で机を並べ、一緒に食堂に通い、何故か同じ部屋に住む妄想が繰り返されている。妄想で恍惚の表情を浮かべる彼女の姿に、エミリイもベアトリクスも言葉を失う。

「ふふっ、喜んでもらえたようね」

「どなたが、どなたが提案をしてくれたんですかっ!？」

一言お礼を言いたいのか、嬉々とした表情でセラスに詰め寄る。

すると彼女は上機嫌な笑顔で、隣の応接室への扉に向かって一言呼びかける。

呼びかけに応じて扉が開き、現れたのはナギとアリカだった。

「ナナナ、ナギ様あっ!？」

憧れの人物の登場にエミリイは驚きと興奮を隠せない。

一方のベアトリクスは、ナギではなく、隣に立つアリカに注目していた。

「アリカ様……本物の」

実はベアトリクスはエミリイと共にナギのファンクラブに入会しているが、実は他にも二つのファンクラブに所属している。

一つはナギの仲間の一人、ジャック・ラカンのファンクラブ。そしてもう一つが、アリカのファンクラブなのだ。

寧ろ、彼女にとってはアリカファンクラブの方が本命だったりするので、まるでアリカを神聖視するかのようになり、目を輝かせて呆けている。

「よっ、久しぶりだな」

「元気にしておったか」

「はい。ご無沙汰しております」

何気なく挨拶を交わす様子に、エミリイがセクストウムを問い詰める。

「せ、セクストウムさん、ナギ様とお知り合いなんですかっ!？」

「知り合いもなにも、後見人なんだけど」

「ここに、後見人!？」

こんな身近に憧れの人物の関係者がいると分かり、エミリイは口をパクパクさせて言葉を失う。

ベアトリクスも、まるで羨ましがするような視線を向ける。

「五人の兄達には別の後見が付いたんだけどね。それより、本当に麻帆良に行っていていいんですかっ!？」

「ああ、勿論だ! ネギの事を頼むぜ!」

親指を立てて肯定した言葉は、セクストウムにとって甘美な響きだった。

しかも息子の事を頼むと言われ、まるで結婚の挨拶に来て認められたような感覚に陥る。

こうなっては、もう簡単にはセクストウムは止まらない。

「お任せください! このセクストウム、全力を持ってネギ君のお世話をさせていただきます!」

「うむ、よく言ったの」

「そうそう、こいつらとも仲良くやってくれよ」

そう言って差し出したのは、2・Aにおけるネギの関係者の写真。

叔母の明日菜は勿論、ネギの知らぬ間に決まっていた嫁候補四人の
写真も。

これがセクストウムの何かを切った。

「ふ、ふふふふ、この女達がネギ君の……」

「どうじゃ、勝つ自信はあるかの？」

「あつたり前です！ こんな女狐に負けるもんですか、ネギ君の隣
に立つのは私です！」

両拳を握り締め、背後に大量の水と、その水によつて作られた立方
体がいくつも現れる。

セラスは笑顔で障壁で水を防ぎ、エミリイとベアトリクスもそれに
便乗して隠れている。

その一方で、ナギ達は平気な顔でセクストウムと会話を続ける。

「うむ、その意気や良し。ゆけ、セクストウム。見事に勝てれば、
我が息子をくれてやる」

「はい！」

「はっはっはっ。面白い事になってきたな。後でネギにメールしと
くか」

後にそのメールが発端となり、麻帆良の魔法関係者の間に語り継が
れる事となる、新たな戦いが発生するとは、この時は誰も知りな
かった。

「うふふ、若いつていいわね」

「そつという問題ですの！？」

かくして、セクストウムの麻帆良行きが決定した。

果たして彼女の参入は、ネギの修行にどのような影響を与えるのだ

ろ
う
か。

番外編 Sさんの日常（後書き）

今回は、前のフェイトに続いてのアーウェルンクスの一員による番外編でした。

何か誤字、脱字等ありましたら、お教えください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3055u/>

ネギの夢見た完全なる世界を、可能な限り弄ってみた

2011年10月30日00時21分発行